

第 17 章

カリに対する処罰と報い

第 1 節

सूत उवाच

तत्र गोमिथुनं राजा हन्यमानमनाथवत् ।
दण्डहस्तं च वृषलं ददृशे नृपलाञ्छनम् ॥ १ ॥

sūta uvāca

*tatra go-mithunam rājā
hanyamānam anāthavat
daṇḍa-hastam ca vṛṣalam
dadṛṣe nṛpa-lāñchanam*

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *tatra*—そこで; *go-mithunam*—雌牛と雄牛; *rājā*—王; *hanyamānam*—叩かれて; *anātha-vat*—彼らの主人を失ったかのように; *daṇḍa-hastam*—手に棍棒を持ち; *ca*—もまた; *vṛṣalam*—下等な階級のシュードラ; *dadṛṣe*—見た; *nṛpa*—王; *lāñchanam*—~のように服を着て。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「マハーラージャ・パリークシットは、その場所に到着したあと、あたかも王であるかのような衣服をまとった下等階級のシュードラが、棒を手に、飼い主を失ってしまったように見える雌牛と雄牛を殴りつけているのを見た」

要旨解説

カリ時代のもっとも顕著な兆しは、低い階級のシュードラ、すなわちブラーフマナ文化もなく、精神的入門も受けていない者たちが政治的指導者か国王のようなかっこうをし、そのような非クシャトリーヤ指導者がなにも悪いことをしていない動物たち、とくに雌牛や雄牛を殺す状況が蔓延していることにあります。雄牛と雌牛が、ほんとうのヴァイシャ、商業者階級に守られなくなってしまうのです。『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第44節）では、ヴァイシャは農業と牛の保護、そして商取引にかかわるもの、と定義されています。カリ時代では、墮

落しきったヴァイシャ・商人が牛を屠殺場にする仕事にかかわっています。本来クシャトリヤは国内の市民を守り、ヴァイシャは雌牛と雄牛を守って穀物と牛乳の生産に活用する本務があります。雌牛は牛乳を、雄牛は穀物を生産するためにいます。しかしカリ時代では、シュードラ階級たちが指導者の地位におさまり、ヴァイシャに守られていない雌牛と雄牛、すなわち母親と父親は、シュードラの政治家たちが管理する屠殺場に送られているのです。

第2節

वृषं मृणालधवलं मेहन्तमिव बिभ्यतम् ।
वेपमानं पदैकेन सीदन्तं शूद्रताडितम् ॥ २ ॥

vṛṣam mṛṇāla-dhavalam
mehantam iva bibhyatam
vepamānam padaikena
sīdantam śūdra-tāḍitam

vṛṣam—その雄牛; *mṛṇāla-dhavalam*—白い蓮華の花のように純白の; *mehantam*—失禁している; *iva*—～かのように; *bibhyatam*—あまりにも恐れて; *vepamānam*—震えている; *padā ekena*—1本の足だけで立っている; *sīdantam*—恐れて; *śūdra-tāḍitam*—シュードラに叩かれている。

その雄牛は、白い蓮華の花のように純白の体をしていた。自分を叩いているそのシュードラに恐怖を感じ、あまりの恐ろしさに、1本足で立ちつくし、震えながら失禁していた。

要旨解説

カリ時代の次の兆候は、一点の穢れのない、純白の蓮華の花のような宗教原則が、非文化的なシュードラの現代人に攻撃されることです。かれらはブラーフマナやクシャトリヤの先祖を持つ子孫かもしれませんが、十分な教育を受けておらず、またヴェーダの知恵を授かっていないためにシュードラのようになって宗教原則を無視し、やがて宗教心篤い人々はそのような人間たちに怖がらせられるようになります。かれらは宗教原則をいっさい拒絶することをおおっぴらに宣言し、宗教という純粹無垢な雄牛を殺すためだけに、多くの「～イズム」や新興宗教が雨後の竹の子のように乱立します。国は、特定の宗教原則にかかわらない非宗教国家を謳い、その結果、世の中は宗教原則にはまったく無関心になります。市民たちは、サードゥ、シャーストラ、グルにはなんの敬意も払わず、好き勝手にふるまうようになります。雄牛が1本足で

立っているという様子は、宗教原則がしだいに減少していくことを物語っています。宗教原則がわずかでも残っているとしても、多くの障害のためにその原則は混乱していきます。怯えて震える者がいつなんどきでも倒れてしまう可能性があるように。

第3節

गां च धर्मदुघां दीनां भृशं शूद्रपदाहताम् ।
विवत्सामाश्रुवदनां क्षामां यवसमिच्छतीम् ॥ ३ ॥

*gām ca dharma-dughām dīnām
bhṛśam śūdra-padāhatām
vivatsām āśru-vadanām
kṣāmām yavasam icchatīm*

gām—雌牛; *ca*—もまた; *dharma-dughām*—彼女から宗教原則を取りだすことができるので有益である; *dīnām*—哀れな境遇に置かれている; *bhṛśam*—苦しんで; *śūdra*—下等なカースト; *pada-āhatām*—足を叩かれて; *vivatsām*—仔牛を持っていない; *āśru-vadanām*—目に涙を浮かべている; *kṣāmām*—非常に弱々しい; *yavasam*—草; *icchatīm*—草を食べたがっているかのように。

雌牛から宗教原則を引きだすことができるため、雌牛は有益な動物であるが、いまでは仔牛さえいない哀れな境遇に置かれている。その足はシュードラに叩かれつづけている。目からは涙が流れ、苦しみ、力なく立っている。そして野に芽吹く草を求めていた。

要旨解説

カリ時代に現われる次の兆候は雌牛の苦しみです。牛乳を搾る、とは宗教原則を液体の形で引きだすことを表わしています。かつては牛乳だけで生きている偉大なりシやムニたちがいました。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、世帯者が牛乳を搾っているときに家を訪ね、少しだけもらうのを常としていました。50年前でさえ、世帯者たちはサードウたちに1リットルでも2リットルでも、まるで水でもあげるように牛乳を差しだしていました。サナータニスト（ヴェーダ原則の従者）には、世帯生活の必需品として雌牛と雄牛は必ず所有していましたし、牛乳は飲むだけではなく、宗教原則を得るという意味も含まれていました。サナータニストは宗教原則にもとづいて雌牛を崇拜し、ブラーフマナを尊ぶものです。牛乳は儀式の火のために必要で、儀式をすることで世帯者は幸せになることができます。仔牛は見目に

美しいばかりではなく、母牛に喜びをもたらし、満足した雌牛はたくさんの母乳を出します。しかしカリ・ユガになると、『シュリーマド・バーガヴァタム』には記述されていない目的で仔牛は母牛から引きはなされます。雌牛は目に涙を浮かべながら立ちつくし、シュードラの乳搾りが不自然な方法でミルクを絞りだし、もう絞れなくなると屠殺場に送ります。このようなひどい罪な行為の代償として、現代社会にあるあらゆる困難が充満しているのです。人々は、経済発展という名前のもていった自分たちがなにをしているのかまったく知りません。カリの影響は人々を無知の暗闇に閉じこめつけます。平和と繁栄を求めてどれほど努力するかわりに、雌牛や雄牛たちがあらゆる面で幸せに生きられるよう、見守ってあげなくてはならないのです。愚かな人々は、雌牛と雄牛を幸せにしさえすれば自分たちも幸せになることを知りませんが、それは自然の法則に定められた明白な事実なのです。その原則を『シュリーマド・バーガヴァタム』の権威にもとづいて、人類すべての幸せのために受け入れようではありませんか。

第4節

पप्रच्छ रथमारूढः कार्तस्वरपरिच्छदम् ।
मेघगम्भीरया वाचा समारोपितकार्मुकः ॥ ४ ॥

*papraccha ratham ārūḍhaḥ
kārtasvara-paricchadam
megha-gambhīrayā vācā
samāropita-kārmukaḥ*

papraccha—武装して；*ratham*—馬車；*ārūḍhaḥ*—～に座っている；*kārtasvara*—黄金；*paricchadam*—～で彫刻された；*megha*—雲；*gambhīrayā*—解放している；*vācā*—音；*samāropita*—十分に装備して；*kārmukaḥ*—矢と弓。

弓と矢で完全武装し、黄金の彫刻をほどこした馬車に座したマハーラージャ・パリークシットは、その男（シュードラ）に、雷鳴がとどろくような重厚な声で語りかけた。

要旨解説

行政指導者あるいはマハーラージャ・パリークシットのような国王は、威厳に満ちた権威をそなえ、無法者を処罰するために完全武装し、カリ時代の手先に戦いを挑むことができます。

そうであってこそ、墮落した時代に対抗できるのです。しかし、それほどのたくましい指導者がいないために、平和の望みを打ち砕く混乱がいつも蔓延しています。選ばれただけ、という見せかけの政治家は、墮落した大衆の代表者としては、マハーラージャ・パリークシットのよ
うな屈強な国王とは比べものにもなりません。大切なことは国王としての衣服でも雰囲気でも
ありません。行動こそがその地位を決定するのです。

第5節

कस्त्वं मच्छरणे लोके बलाद्धंस्यबलान् बली ।
नरदेवोऽसि वेषेण नटवत्कर्मणाद्विजः ॥ ५ ॥

*kas tvam mac-charaṇe loke
balād dhaṁsy abalān balī
nara-devo 'si veṣeṇa
naṭavat karmaṇādvijah*

kaḥ—何者か; *tvam*—あなた; *mat*—私の; *śaraṇe*—保護下; *loke*—この世界で; *balāt*—力づくで;
haṁsi—殺している; *abalān*—無力な者達; *balī*—力強く見えても; *nara-devaḥ*—人間の神; *asi*—
に見える; *veṣeṇa*—あなたの衣服から; *naṭa-vat*—芝居を演じる者のように; *karmaṇā*—行為によ
って; *advi-jah*—文化においては再誕者ではない。

おまえは何者だ。強そうには見えるが、私に守られているこの地で無力な者を殺そうとして
いる！ おまえの出で立ちが聖者か国王に見える、しかし、していることは再誕のクシャトリ
ヤの原則に反しているではないか。

要旨解説

ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャは再誕者と呼ばれます。両親の結合による1回目の
誕生を経たあと、高尚な人間階級になるために、本物のアーチャーリヤ・精神指導者から精
神的入門を受けることで、文化的な若返りをとおして新しい誕生を授かるからです。ですから
クシャトリヤは、ブラーフマナと同じ再誕者であり、その義務は無力な人々を守ることにあり
ます。クシャトリヤの王は神の代表者であり、無力な者を守り、邪悪な者を懲罰します。統治
者によるこの役目執行に異常がきたすときは、神聖な王国の原則を再確立させるために必ず主
が降誕します。カリ時代では、哀れで無力な動物たち、とくに乳牛たちは行政指導者による完

全な保護を受けなくてはならないのに、無制限に殺されています。ならば、指導者たちの目のまゝでそのようなことが起きているのであれば、名ばかりの神の代表者というほかはありません。無力な市民を守るべきはずなのに服装や名前だけで力を誇示している指導者や統治者は、じっさいはなんの価値もない人間であり、再誕者としての文化的美質のない下等な人間です。下等な1回の誕生者（精神的な文化のない者）は、正しく平等な対応はできません。そのためにカリ時代では、悪政のためにだれもが不幸な境遇に置かれているのです。現代社会は精神的文化に支えられた再誕者の世界ではありません。ですから、人々が作りだした、すなわち再誕ではない人々が作った政府は、万民を不幸におとし入れるカリの政府なのです。

第6節

यस्त्वं कृष्णे गते दूरं सहगाण्डीवधन्वना ।
शौच्योऽस्यशौच्यान् रहसि प्रहरन् वधमर्हसि ॥ ६ ॥

*yas tvam kṛṣṇe gate dūram
saha-gāṇḍīva-dhanvanā
śocyo 'sy aśocyān rahasi
praharan vadham arhasi*

yaḥ—～のため; *tvam*—極悪人のおまえ; *kṛṣṇe*—主クリシュナ; *gate*—行ってしまった; *dūram*—視界から去った; *saha*—～と共に; *gāṇḍīva*—ガンディーヴァという名の弓; *dhanvanā*—運ぶ者、アルジュナ; *śocyāḥ*—犯罪者; *asi*—お前は～と考えられる; *aśocyān*—純真無垢な; *rahasi*—誰もいない場所で; *praharan*—叩いている; *vadham*—殺されること; *arhasi*—～に値する。

この極悪人め。純真無垢な乳牛を叩くとはなにごとだ。主クリシュナが、そしてガンディーヴァの弓を持つアルジュナがいなくなったゆえの悪業か。だれもないこの場所で純真無垢な者を毆打しているおまえは罪人であり、死ぬに値する。

要旨解説

神がことごとく無視され、アルジュナのような献愛者の戦士がいない文化では、カリ時代の片棒たちはこの無法の王国に乗じ、人目につかない屠殺場で乳牛のような無垢な動物を殺そうとします。この動物の殺害者は、マハーラージャ・パリークシットのような敬虔な王の命令で

死罪を受けるにふさわしい輩であり、敬虔な王は、人目につかないところで動物を殺すような犯罪者は死刑をもって断罪するにふさわしい、と判断します。隠れた場所で無邪気な幼い子を殺す殺人者と同じなのです。

第7節

त्वं वा मृणालधवलः पादैर्न्यूनः पदा चरन् ।
वृषरूपेण किं कश्चिद् देवो नः परिखेदयन् ॥ ७ ॥

*tvam vā mṛṇāla-dhavalah
pādair nyūnah padā caran
vṛṣa-rūpeṇa kim kaścid
devo nah parikhedayan*

tvam—あなた; *vā*—どちらか; *mṛṇāla-dhavalah*—蓮華のように白い; *pādaiḥ*—3本足の; *nyūnah*—奪われて; *padā*—1本足で; *caran*—動いている; *vṛṣa*—雄牛; *rūpeṇa*—～の姿で; *kim*—～かどうか; *kaścit*—誰か; *devah*—半神; *nah*—私達に; *parikhedayan*—悲しみをもたらしている。

次にかれ（マハーラージャ・パリークシット）は雄牛に語りかけた。「あなたはいったいどれなのでしょう。純白の蓮華のような肌をした雄牛か、それとも半神なのでしょう。3本の足を失い、いまは1本の足だけで立っておられる。あなたは雄牛の姿となって私達を悲しみに落としいれようとしている半神なのでしょうか」

要旨解説

少なくともマハーラージャ・パリークシットの時代までは、雌牛と雄牛がこのような哀れな境遇になることは想像さえできないことでした。だからこそパリークシット王は、このような恐ろしい光景を見たことに衝撃を受けたのです。そして尋ねています、その雄牛はこれほど悲惨な状態に置かれることで、雌牛と雄牛の未来の姿をほのめかしている半神ではないのか、と。

第8節

न जातु कौरवेन्द्राणां दोर्दण्डपरिरम्भिते ।
भूतलेऽनुपतन्त्यस्मिन् विना ते प्राणिनां शुचः ॥ ८ ॥

na jātu kauravendrāṇām
dordāṇḍa-parirambhite
bhū-tale 'nupatanty asmin
vinā te prāṇinām śucaḥ

na—～ではない; jātu—いつでも; kaurava-indrāṇām—クル王家の国王達の; dordāṇḍa—軍隊の力で; parirambhite—～に守られて; bhū-tale—地球の表面で; anupatanti—嘆いている; asmin—今まで; vinā—～を除いては; te—あなた; prāṇinām—生命体の; śucaḥ—目に浮かぶ涙。

クル王家の国王たちの軍隊に巧みに守られたこの国で、あなたが涙に暮れて悲しんでいる様子を見たのはこれが初めてです。これまで、地上のだれひとりとして、王に無視されて涙を流した者はいなかったのです。

要旨解説

人類と動物の命を守ることは、政府にとって最初の、なによりも大切な義務です。政府はこの原則をないがしろにはなりません。純粹な心の魂にとって、カリ時代の国が組織だてて動物を殺害している様子は、ただただ恐ろしい光景なのです。マハーラージャ・パリークシットは、雄牛が目に涙を浮かべている表情を見て悲しみ、そして自分の国でこのような前例のない事態が起こっていることに驚いています。人間も動物も、どちらの命も等しく守られていました。それが神の王国の決まりなのです。

第9節

मा सौरभेयात्र शुचो व्येतु ते वृषलाद् भयम् ।
मा रोदीरम्ब भद्रं ते खलानां मयि शास्तरि ॥ ९ ॥

mā saurabheyātra śuco
vyetu te vṛṣalād bhayam
mā rodīr amba bhadraṁ te
khalānām mayi śāstari

mā—～しない; saurabheya—スラビの子よ; atra—私の王国で; śucaḥ—嘆き; vyetu—～があるように; te—あなたの; vṛṣalāt—シュードラによって; bhayam—恐れの原因; mā—～しない; rodīḥ—泣く; amba—母なる雌牛; bhadraṁ—あらゆる幸; te—あなたに; khalānām—嫉妬深い者

の; mayi—私が生きている間; śāstari—支配者あるいは征服者。

スラビの子よ。あなたはこれ以上嘆くことはありません。この下劣なシュードラを恐れることもないのです。母なる牛よ、私が嫉妬深い者たちすべての支配者、鎮圧者として君臨しているかぎり、あなたが泣く理由はどこにもありません。すべてはあなたの幸となるでしょう。

要旨解説

雄牛、雌牛、他のいっさいの動物の保護は、マハーラージャ・パリークシットのような指導者に治められた国で実現することです。マハーラージャ・パリークシットは雌牛に母親と呼びかけました。優れた文化のもとで育ち、再誕者で、クシャトリヤの王だったからです。スラビは精神的惑星にいる乳牛の名前で、とくに主シュリー・クリシュナみずから育てています。人間が至高主の姿に合わせて作られたように、乳牛は精神的王国にいるスラビ牛の姿に似せて作られました。人間社会では人間があらゆる面で守られますが、奇跡の食べ物・牛乳を供給して人間を守っているスラビの子孫を守る法律はありません。しかしマハーラージャ・パリークシットとパーンダヴァ兄弟は、雌牛と雄牛の重要性を完璧に認識していたからこそ、牛を殺す者には死罪を含むあらゆる刑をもって処罰するつもりでいました。ときどき牛を守る運動が始まるがありますが、敬虔な指導者も適切な法律もないために雌牛も雄牛も守られていません。人間社会は雌牛と雄牛の大切さを認識し、マハーラージャ・パリークシットの足跡に従ってこの大切な動物を全面的に守らなくてはなりません。牛とブラーフマナに優しい主は (go-brāhmaṇa-hitāya ゴー・ブラーフマナ・ヒターヤ)、私たちが牛のブラーフマナを守る文化に従えば、その行為を喜び、ほんとうの平和を私たちに授けてくださるのです。

第 10 – 11 節

यस्य राष्ट्रे प्रजाः सर्वास्त्रस्यन्ते साध्व्यसाधुभिः ।
तस्य मत्तस्य नश्यन्ति कीर्तिरायुर्भगो गतिः ॥ १० ॥
एष राज्ञां परो धर्मो ह्यार्तानामार्तिनिग्रहः ।
अत एनं वधिष्यामि भूतद्रुहमसत्तमम् ॥ ११ ॥

yasya rāṣṭre prajāḥ sarvās
trasyante sādhy asādhubhiḥ
tasya mattasya naśyanti
kīrtir āyur bhago gatiḥ

*eṣa rājñām paro dharmo
hy ārtānām ārti-nigrahaḥ
ata enam vadhiṣyāmi
bhūta-druham asattamam*

yasya—～である者に; *rāṣṭre*—その国で; *prajāḥ*—生命体; *sarvāḥ*—だれもかれも; *trasyante*—怖がらせられて; *sādhvi*—貞節なる者よ; *asādhubhiḥ*—邪悪な人間によって; *tasya*—彼の; *mattasya*—幻惑された者の; *naśyanti*—消滅する; *kīrtiḥ*—名声; *āyuh*—寿命; *bhagaḥ*—幸運; *gatiḥ*—優れた再誕; *eṣaḥ*—これらは～である; *rājñām*—王達の; *paraḥ*—より優れた; *dharmāḥ*—職務; *hi*—確かに; *ārtānām*—苦しむ者達の; *ārti*—苦しみ; *nigrahaḥ*—抑えている; *ataḥ*—ゆえに; *enam*—この男; *vadhiṣyāmi*—私は殺すだろう; *bhūta-druham*—他の生命体達を嫌悪して; *asat-tamam*—もっとも卑劣な者。

貞節なる方よ。国王の優れた名前、寿命、優れた再誕は、すべての生命体が、その国内に住む極悪人たちに脅されるときに消滅します。苦悩する者たちの苦しみをまず鎮めることが、国王の最初の義務であることにまちがいありません。ですから私は、ほかの生物に暴力をふるっている最悪で卑劣なこの男を殺さなくてはなりません。

要旨解説

町や村で野生動物が騒動を起こせば、警察や市民が動き、その動物を殺します。同じように、泥棒、盗賊、殺人者のような極悪人が世にはびこれば、政府はすぐにかれらを殺して義務をまっとうしなくてはなりません。同じ処罰は、動物を殺すたちにも科せられるべきです。国内の動物たちもプラジャー (*prajā*) だからです。プラジャーとは、その国に誕生した者、という意味で、それには人間も動物も含まれます。国内に誕生した生物にはすべて、国王に守られて生きる権利があります。ジャングルに住む動物でも国王にとっては臣民であり、かれらも生きる権利を持っています。雌牛も雄牛など言うまでもありません。

どのような生物だとしても、人がほかの生物を脅かすのは非道なことであり、国王はすぐにそのような混乱の元凶を始末しなくてはなりません。野生動物が騒動を起こせば殺されるように、ジャングルの動物や他の動物たちを不必要に殺したり怖がらせたりするのであれば、すぐに処罰されてしかるべきです。至高主の法律のもとで、すべての生命体はどのような姿であっても主の子どもであり、自然の法則で命じられる以外、ほかの動物を殺す権利はだれにもありません。虎は自分が生きていくために弱い動物を殺すことはできますが、人間が同じ理由でほかの生物を殺すことは許されません。それが、ある生物はほかの生物を食べることで生き残る、

という法則を作った神の法則です。ですから、菜食主義者でも、やはりほかの生物を食べて生きている、ということになります。神の法則で定められているように、特定の種類の生物だけを食べて生きるべきだということです。『シュリー・イーシャ・ウパニシャッド』は、私たちは、自分の勝手な意志ではなく主の指示に従って生きるべきである、と教えています。人間はさまざまな穀物、くだもの、牛乳などで生きるよう神に定められており、動物性の食糧は、特別の例外を除いて必要ありません。

惑わされた王や国の指導者は、偉大な哲学者や博識な学者として呼ばれても、国内に屠殺場を作ることを許可します。苦しめられた哀れな動物が、そのような愚かな王や指導者の地獄への道を実確なものにすることを知らずに。国の指導者は、人間でも動物でも、自分のプラジャーたちの安全にいつも目をこらし、どんな場所でも、どのような動物でもほかの生物に脅かされていないかどうか警戒してはなりません。苦しめているのであれば、マハーラージャ・パリークシットがしめしたように、すぐに捕らえて殺さなくてはなりません。

人民のための政府、あるいは人民による政府は、愚かな政治家たちの勝手な思いで無実の動物を殺すことを許すべきではありません。啓示經典に書かれているように、神の法典を知るべきです。マハーラージャ・パリークシットは神の法典を引用し、無責任な王や国の指導者は、名声、寿命、力、権力、そして最終的には死後の高尚な生涯と解放への発展を危険にさらしている、と言っています。このような愚かな者たちは来世があることさえ信じません。

この節について解説しているとき、ある有名な政治家が遺言を残して他界しましたが、その内容は、マハーラージャ・パリークシットが引用した神の法典に関してなにも知らないことを露呈しています。その文面を見れば、その政治家の無知がよくわかります。「私はそのような儀式などまったく信じていないし、たとえ形式的にでもその儀式に従うのは偽善で、自分も人々も欺く行為でしかない。私はそのような宗教的感情はない」

名の知れたこの現代政治家の言葉と、マハーラージャ・パリークシットという言葉には大きな違いがあります。マハーラージャ・パリークシットは經典の法典に従う信心深い人物ですが、現代政治家は、個人的な信念と感情で行動します。物質界では偉人でも、結局、条件づけられた魂でしかありません。手も足も物質自然界というひもで縛られているのに、愚かで条件づけられた魂は、「自分は思いどおりに、自由に行動できる」と考えています。結論として、マハーラージャ・パリークシットの時代に生きていた人々はだれもが幸せで、動物は正しく守っていた、と言いきることができます。国の指導者はきまぐれではなかったし、神の法則を熟知していたからです。愚かで信念のない者たちは主の存在を無視し、価値ある人間生活を犠牲にしながらか「私は宗教とは無関係である」と主張しています。人間生活はとくに神の科学を知るため

にあります。ところが、とくにカリ時代では、愚かな人間たちは神を知ることや神の存在についてはもちろん、宗教的信念をあからさまに否定しています。誕生、死、老年、病気によって、いつでも神の法則に縛られているのに。

第 1 2 節

कोऽवृश्चत् तव पादांस्त्रीन् सौरभेय चतुष्पद ।
मा भूवंस्त्वादृशा राष्ट्रक्रे राज्ञां कृष्णानुवर्तिनाम् ॥ १२ ॥

*ko 'vṛścat tava pādāṁs trīn
saurabheya catuṣ-pada
mā bhūvaṁs tvādṛśā rāṣṭre
rājñām kṛṣṇānuvartinām*

kaḥ—彼は誰か; *avṛścat*—切り落とされて; *tava*—あなたの; *pādān*—足; *trīn*—3つ; *saurabheya*—おお、スラビの子よ; *catuṣ-pada*—あなたは4本足である; *mā*—決して～であるべきではない; *bhūvan*—そのようになって; *tvādṛśāḥ*—あなた自身として; *rāṣṭre*—国内で; *rājñām*—王達の; *kṛṣṇa-anuvartinām*—クリシュナ、最高人格主神が定めた規則に従う者達。

かれ（マハーラージャ・パリークシット）は、雄牛になんども話しかけ、尋ねた。「スラビのご子息よ。だれがあなたの3本の足を切り落としたのでしょうか。国王が最高人格主神クリシュナが定めた法典に忠実に従っている国には、あなたほど不幸な方はいません」

要旨解説

国王あるいは国の指導者は、主クリシュナが定めた規則（『バガヴァッド・ギーター』と『シュリーマド・バーガヴァタム』）を理解し、人生の使命をまっとうするために、物質世界にある苦しみすべてに終止符を打つためにその教えどおりに行動しなくてはなりません。主クリシュナの規則を知る人は、その終着点に難なく辿りつくことができます。『バガヴァッド・ギーター』の読者はその大意のなかに主神の規則を理解し、また『シュリーマド・バーガヴァタム』にも同じ規則がさらに詳しく説明されています。

市民がクリシュナの教えに従っている国で、不幸な人は一人もいません。逆に、従っていないときの最初の兆候は、宗教の権化の3本足が切り落とされ、その結果として人々は苦しんでいます。クリシュナがみずから存在していたとき、だれもがクリシュナの規則に疑いもなく従

っていましたが、主がいなくなったあと、その規則は、指導的立場にあっても盲目的状況に置かれている人々を導くために、『シュリーマド・バーガヴァタム』のページのなかに網羅されています。

第13節

आख्याहि वृष भद्रं वः साधूनामकृतागसाम् ।
आत्मवैरूप्यकर्तारं पार्थानां कीर्तिदूषणम् ॥ १३ ॥

*ākhyāhi vṛṣa bhadram vaḥ
sādhūnām akṛtāgasām
ātma-vairūpya-kartāram
pārthānām kīrti-dūṣaṇam*

ākhyāhi—教えてください; *vṛṣa*—雄牛よ; *bhadram*—良い; *vaḥ*—あなたにとって; *sādhūnām*—正直な者の; *akṛta-āgasām*—非のない者達の; *ātma-vairūpya*—自己の醜悪化; *kartāram*—行動者; *pārthānām*—プリターの息子達の; *kīrti-dūṣaṇam*—名声を脅かす。

雄牛よ。あなたに非はなく、すべてにおいて正直な方です。だからこそ私は、あなたのこの上ない幸運を祈ります。どうか話していただきたい、あなたをこのように傷つけた者を、プリターの子息たちの名声を脅かす者たちを。

要旨解説

マハーラージャ・ラーマチャンドラが治めた時代の、そしてその足跡に従ったパーンダヴァ兄弟たちのような王たちの名声は決して忘れ去られることはありません。その王国では、罪のない、そして正直な生命体たちは決して不幸にはならなかったからです。雄牛と雌牛の糞も尿も人間社会の利益のために使われているのですから、かれらは罪なき生物の象徴と言えます。マハーラージャ・パリークシットをはじめとするプリターの子息たちの子孫は、自分たちの名声が失われることを恐れていましたが、現代の指導者たちは非のない動物たちを殺すことになんどの恐怖も感じません。ここに、敬虔な王たちの統治と、神の規則を知らない無責任な国の筆頭者が支配する現代国家の違いを見ることができます。

第 1 4 節

जनेऽनागस्यघं युञ्जन् सर्वतोऽस्य च मद्भयम् ।
साधूनां भद्रमेव स्यादसाधुदमने कृते ॥ १४ ॥

jane 'nāgasy agham̐ yuñjan
sarvato 'sya ca mad-bhayam
sādhūnām̐ bhadram̐ eva syād
asādhu-damane kṛte

jane—生命体達に; *anāgasi*—罪のない者達; *agham*—苦しみ; *yuñjan*—適用することで; *sarvataḥ*—どのような場所でも; *asya*—そのような冒涇者達の; *ca*—そして; *mat-bhayam*—私を恐れる; *sādhūnām̐*—正直な人々の; *bhadram̐*—幸運; *eva*—確かに; *syāt*—起こるだろう; *asādhu*—不正直な極悪人; *damane*—抑圧されて; *kṛte*—そのように為されて。

罪なき生物に苦しみを与える者はだれであろうと、世界のどこにしようと、私への恐れからまぬがれることはできません。不正直な極悪人を鎮圧すれば、おのずと、罪なき者を助けることになるのです

要旨解説

不正直な極悪人は、弱腰で無能な指導者たちが原因で世にはびこるようになります。しかし、国の筆頭者が国内のどこでも、その不正直な極悪人全員を鎮圧する強硬な姿勢を貫けば、かれらはのさばることができなくなります。極悪人が適切な見本として処罰されれば、自然に、すばらしい幸運も伴うものです。先に述べられたように、王や国の首脳陣が国内にいる平和で罪のない市民たちを守るこそ、かれらの最優先の義務です。主の献愛者は、本来心穏やかで罪をおかしませんから、すべての人々を主の献愛者に変えることが国の義務と言えます。それが実現すれば、自然に、国内には平和で罪のない人々があふれるようになります。王の唯一の義務は、不正直な極悪人を鎮圧することにあります。そのことが、人間社会全体に平和と調和をもたらすのです。

第 1 5 節

अनागःस्विह भूतेषु य आगस्कृन्निरङ्कुशः ।
आहर्तास्मि भुजं साक्षादमर्त्यस्यापि सारादम् ॥ १५ ॥

*anāgaḥsv iha bhūteṣu
ya āgas-kṛn niraṅkuśaḥ
āhartāsmi bhujam sākṣād
amartyasyāpi sāṅgadam*

anāgaḥsu iha—罪のない人々に対して; *bhūteṣu*—生命体達; *yaḥ*—その人物; *āgaḥ-kṛt*—冒涇を犯す; *niraṅkuśaḥ*—成り上がり者達; *āhartā asmi*—私が表明する; *bhujam*—武器; *sākṣāt*—直接に; *amartyasya api*—半神であっても; *sa-aṅgadam*—装飾品と甲冑 (かっちゅう) で。

罪なき者たちを虐待する成り上がり者たちは、私がじかに手をくします。その相手が甲冑と装飾品で身を固めた天界の住人であろうと。

要旨解説

天界の住人はアマラ (*amara*) 「不死」と言われることがありますが、それはかれらが人間とは比べものにならない長い寿命に恵まれているからです。長くて100年しか生きられない人間には、何百万年もの寿命は確かに「不死」に思えるはずです。たとえば『バガヴァッド・ギーター』では、「ブラフマローカの1日は4,300,000×1,000 (太陽年)」と記述されています。同じように、ほかの天国の惑星では1日が地球の6ヶ月に相当し、その住人たちはかれらの年月計算で1千万年生きるとされています。ですから、このような高い惑星での寿命が人間よりはるかに長いため、物質宇宙ではだれも不死ではないはずなのに、人間はかれらのことを想像し、「天界の住人は不死」と表現しているのです。

マハーラージャ・パリークシットは、そのような天界の住人にさえ、もしも罪のない者を虐待するのであれば許さない、と挑戦しています。これは、国の筆頭者はマハーラージャ・パリークシットと同じほど強くあるべきである、そうすることで、最強の冒涇者であっても、絶対に処罰する決意で対処することができるからです。神の法律に対する冒涇者は必ず処罰される——これが国の筆頭者の原則とされなくてはなりません。

第16節

राज्ञो हि परमो धर्मः स्वधर्मस्थानुपालनम् ।
शासतोऽन्यान् यथाशास्त्रमनापद्युत्पथानिह ॥ १६ ॥

rājño hi paramo dharmah
sva-dharma-sthānupālanam
śāsato 'nyān yathā-śāstram
anāpady utpathān iha

rājñah—国王あるいは行政長官の; hi—確かに; paramah—至上の; dharmah—定められた職務; sva-dharma-stha—自分の職務に忠実な者; anupālanam—いつも保護している; śāsatah—支配している間; anyān—他の者達; yathā—～にもとづいて; śāstram—経典による統治; anāpadi—危険のない; utpathān—逸れている人々; iha—実際のところ。

世を治める王の至上の義務は、法を遵守する人々を守り、緊急ではない通常時の経典の教えから逸れた者たちを懲罰することにあります。

要旨解説

経典にはアーパドゥ・ダルマ (āpad-dharma) 「異常事態における定められた義務」について説かれています。そこでは、あるとき大聖者ヴィシュヴァーミトラが、異常事態に置かれて犬の肉を食べるはめに陥った事例が挙げられています。緊急の事態では、どのような動物だとしても、動物の肉を食べることを強いられることがあります。だとしても、肉食者たちのために屠殺場を維持する必要があるわけではありませんし、政府がそのことを助長すべきだということでもありません。味覚を楽しむためだけに、定期的に、肉を食べて生きるのはまちがっています。王や国の筆頭者は、不正な楽しみにふけているそのような人々を処罰しなくてはなりません。

さまざまな職務に従事するさまざまな人々のために規則的な経典の教えが用意されており、その教えに従う人々をスヴァダルマ・スタ (svadharmā-stha) 「自分に定められた本務に忠実な者」といいます。『バガヴァッド・ギーター』(第18章・第48節)では、自分に定められた義務は、たとえ完璧にまっとうできなくても放棄してはならない、とされています。スヴァ・ダルマは、状況に強いられて緊急時では破られることもありますが、通常はもちろんそうではありません。国の筆頭者は、スヴァ・ダルマが、それがなんであっても従者たちによって変えられないよう監視し、スヴァ・ダルマの従者を守らなくてはなりません。破る者はシャーストラにもとづいて罰せられるべきであり、また国王の義務は、人々が自分に定められた義務を、経典が示しているとおりに実践するよう見守ることにあります。

第 17 節

धर्म उवाच

एतद् वः पाण्डवेयानां युक्तमार्ताभयं वचः ।
येषां गुणगणैः कृष्णो दौत्यादौ भगवान् कृतः ॥ १७ ॥

dharma uvāca
etat vaḥ pāṇḍaveyānām
yuktam ārtābhayaṁ vacaḥ
yeṣām guṇa-gaṇaiḥ kṛṣṇo
dautyāḍau bhagavān kṛtaḥ

dharmah uvāca—宗教の権化が言った; *etat*—これらすべて; *vaḥ*—あなたによって; *pāṇḍaveyānām*—パандаヴァ王家の者達の; *yuktam*—まさにふさわしい; *ārta*—苦しむ者; *abhayaṁ*—すべての恐怖から解放されて; *vacaḥ*—言葉; *yeṣām*—それら; *guṇa-gaṇaiḥ*—その資格によって; *kṛṣṇaḥ*—主クリシュナでさえ; *dautya-āḍau*—使者などの義務; *bhagavān*—人格主神; *kṛtaḥ*—実行された。

宗教の権化が言った。「いまあなたが語ったそれらの言葉は、パандаヴァ王家の一人としてじつにふさわしいものです。主クリシュナ・人格主神は、パандаヴァ兄弟の献愛奉仕すばらしさに魅了されて、使者としての義務をまっとうされたのです」

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットが口にした保証と挑戦は誇張ではなく、かれの真の力に裏づけられています。マハーラージャは、たとえ天界の住人たちでも、「宗教原則を破る者は私の厳格な政治体制から逃れることはできない」と宣言しました。ありもしない力を自慢げに誇示しているわけではありません。主の献愛者は主に匹敵する力を持ち、いや、ときには主の恩寵を凌ぐことさえあり、献愛者の約束は、ふつうではありえないことでも、主の恩寵で正しく成就されます。パандаヴァ兄弟は、純粋無垢な献愛奉仕と主への全面的な服従によって、主を御者にしたり、使者にしたりしたこともあります。主は献愛者のために、心から喜んでそのような義務をはたしているのです。深い愛情と熱意で主に仕えることしか考えていない無垢な献愛者に仕えたいと思っているからです。アルジュナの孫で、主の名高い友人、そして召使いであるマハーラージャ・パリークシットは、自分の祖父ほどの主の純粋な献愛者ですから、主

はいつでも、かれが母親の胎内で無力に横たわり、アシュヴァッターマーが放った灼熱のブラフマーストラ武器に攻撃されたときでさえ一緒にいました。献愛者はいつでも主に守られていますから、マハーラージャ・パリークシットが「私が守る」と約束すれば、それは必ず実現されるのです。宗教の権化はそのことをありのままに受け入れ、パリークシット王がみずからの高尚な責任に忠実であることに感謝しているのです。

第 18 節

न वयं चो शबीजानि यतः स्युः पुरुषर्षभ ।
पुरुषं तं विजानीमो वाक्यभेदविमोहिताः ॥ १८ ॥

*na vyaṁ kleśa-bijāni
yataḥ syuḥ puruṣarṣabha
puruṣaṁ taṁ vijānīmo
vākya-bheda-vimohitāḥ*

na—～ではない; *vyaṁ*—私達; *kleśa-bijāni*—苦しみの根源; *yataḥ*—どこから; *syuḥ*—それはそうして起こった; *puruṣa-ṛṣabha*—おお、人類の筆頭者よ; *puruṣaṁ*—その人物; *taṁ*—それ; *vijānīmaḥ*—知っている; *vākya-bheda*—さまざまな意見; *vimohitāḥ*—～に惑われて。

人類の第一人者よ。私たちの苦しみの元凶となった極悪人を特定するのはむずかしいことです。なぜなら私たちは、理論にこだわる哲学者たちが言うさまざまな意見で混乱しているからです。

要旨解説

世界には、原因と結果について、とくにさまざまな生命体の苦しみの原因について、自分たちの理論を主張する理論好きな哲学者たちがあふれています。大別すると6人の哲学者が挙げられます。ヴァイシェーシカ哲学の著者カナダ、論理学者のガウタマ、神秘的ヨーガの著者パタンジャリ、サーンキヤ哲学の著者カピラ、カルマ・ミーマーンシャーの著者ジャイミニ、ヴェーダーンタ・ダルシャナの著者ヴァーサデーヴァ。

宗教の権化である雄牛、地球の主宰神である雌牛は、カリ時代の権化が自分たちの苦しみの直接の原因であることはわかっていたのですが、それでも主の献愛者として、主の承認がなければ、だれも自分たちを苦しめられないことも承知していました。『パドゥマ・プラーナ』は、「苦しみとは、昔まいた種がいま結実している状態であるが、まいて作ってしまった罪は、純

粹な献愛奉仕をすることで徐々に弱まっていく」と説いています。ですから献愛者は、不快なことで自分を苦しめている人でも、その苦しみのことでかれらを非難したりしません。なにか間接的な原因があって、かれはそのように行動させられているのだ、と解釈し、だからその苦しみに耐え、その苦しみが神に与えられた一服の薬だと捉えます。でなければ、自分はずっと大きな苦しみを感じているはずだ、と考えるのです。

マハーラージャ・パリークシットは、犯罪者を直接非難する言葉を聞くつもりだったのですが、かれらは、上記の理由から答えることを断りました。しかし、推論に頼る哲学者たちは主の意志が働いていることを認めません。苦しみの原因を自分たちの力で探そうとするのです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーが言います、そのような推論家たちは自分たちが混乱しているため、すべての苦しみの原因は至高主、すなわち人格主神であることが理解できない、と。

第 19 節

केचिद् विकल्पवसना आहुरात्मानमात्मनः ।
दैवमन्येऽपरे कर्म स्वभावमपरे प्रभुम् ॥ १९ ॥

kecid vikalpa-vasanā
āhur ātmānam ātmanah
daivam anye 'pare karma
svabhāvam apare prabhum

kecit—彼らの一部; *vikalpa-vasanāḥ*—あらゆる種類の二元性を否定する者達; *āhuḥ*—宣言する; *ātmānam*—自分自身; *ātmanah*—自己の; *daivam*—超人的な; *anye*—他の者達; *apare*—ほかの誰か; *karma*—活動; *svabhāvam*—物質自然界; *apare*—他の多くの; *prabhum*—権威。

あらゆる二元性を否定する哲学者のなかには、自分の幸福や苦しみの責任を負っているのは自分である、と言う者がいます。また超人的な力が原因だと考えたり、活動そのものが原因であると考えたりする者がいるいっぽう、鈍感な物質主義者は、自然界が窮極の原因だと主張しています。

要旨解説

上記のように、ジャイミニやその従者たちのような哲学者は、果報的活動がすべての苦し

と不幸の原因だとする意見に自信を持ち、たとえなにか高い権威があるとしても、また超人的な力を持つ神や神々がいるとしても、その神や神々も活動に応じた結果を与えるのだから果報的活動に影響されている、と言います。かれらは、活動は活動者によってなされているのだから、活動と活動者は離れているわけではないと考えます。ですから、活動者自身が自分の幸福と苦しみの原因である、というわけです。『バガヴァッド・ギーター』（第6章・第5節）でも、物質的な病に冒されていない心によって、物質的痛みという苦しみから自分を解放させなければならない、と確証しています。このように、自分の心が、物質的な幸福や苦しみを作り出す友人であったり敵であったりするのです。

無神論で物質主義のサーンキヤ哲学者は、物質自然界がすべての原因の原因であると結論しています。物質要素の結合が物質的な幸福と苦しみの原因であり、物質が分解すれば物質的苦悩から解放されると考えています。ガウタマやカナダは分子の結合がすべてであるとし、アシュターヴァクラのような非人格論者は、ブラフマンの精神的光がすべての原因の原因であると結論しました。しかし『バガヴァッド・ギーター』で主はみずから、わたしが非人格のブラフマンの源である、と宣言しています。ですから、人格主神がすべての原因の原因です。そして『ブラフマ・サムヒター』も、主クリシュナこそがあらゆる原因の窮極原因である、と確証しています。

第20節

अप्रतर्क्यादनिर्देश्यादिति केष्वपि निश्चयः ।
अत्रानुरूपं राजर्षे विमृश स्वमनीषया ॥ २० ॥

*apratarkyād anirdeśyād
iti keṣv api niścayaḥ
atrānurūpaṁ rājarṣe
vimṛśa sva-manīṣayā*

apratarkyāt—推論の力を超えて; *anirdeśyāt*—思考力を超えて; *iti*—このように; *keṣu*—誰か; *api*—もまた; *niścayaḥ*—明確に結論されて; *atra*—この中で; *anurūpaṁ*—どちらかが正しい; *rāja-ṛṣe*—王達のなかの聖者よ; *vimṛśa*—あなた自身で判断する; *sva*—あなた自身によって; *manīṣayā*—知性の力。

議論をしたり想像したり、さらには言葉で表現するだけでは苦しみの原因を特定することは

できない、と信じる者たちがいます。王のなかの聖者よ、ご自分の知性を使って、これらをすべて熟考し、判断してください。

要旨解説

この節の言葉のように、ヴァイシュナヴァ、すなわち主の献愛者は、至高主の許しがなければなにも起こりえないことを信じています。主は至上の指揮官です。主みずから、『バガヴァッド・ギーター』（第15章・第15節）で、遍在するパラマートマーとして全生命体の心のなかにとどまり、かれらの行動の一部始終を注視し、また目撃している、と確証しているからです。無神論者が言う「十分な資格をそなえた司法官に証明されないかぎり、まちがった行為をしても処罰されない」という意見はこの節で論破されています。私たち献愛者は、生命体の行動はつねに見られ、いつも行動をともしている存在がいることを信じているからです。生命体は、昔、あるいはいきましたことを忘れてしまうかもしれませんが、肉体という同じ1本の木に、個々の魂と至高の魂・パラマートマーが2羽の鳥のように座っていることを心得ておくべきです。その片方、つまり生命体はその木のくだものを味わっていますが、至高の生命体はその様子を見つめています。ですから、パラマートマーの様相・至高の魂こそが、生命体の行動すべてを目撃しているのであり、そしてパラマートマーの導き一つで、生命体は過去を思いだしたり忘れたりしています。ですから主は、遍在する非人格ブラフマンでもあり、またすべての心臓にいる局所的パラマートマーでもあります。主は、過去・現在・未来を知っている方であり、主にとって隠されたものはなにもありません。献愛者はこの真理をよく知っていますから、結果にこだわりすぎることなく、義務を誠実にまっとうします。また、主がどう反応するかは、推論でも学識でもわかりません。主が、だれかを苦境におとしいれたり、そうでない状況に置いたりするのはなぜでしょうか。主はヴェーダ知識を知る至上の方ですから、真のヴェーダニストです。同時に、主はヴェーダーンタの編纂者でもあります。主から離れている者は一人もいませんし、だれもがさまざまな形で主に奉仕をしています。条件づけられた状態にいる生命体は、その奉仕を物質自然界に強制されて行なっていますが、解放された境地にいる生命体は精神的エネルギーに助けられながら自発的に愛情奉仕をしています。主がすることに矛盾も不明瞭さありません。ビーシュマデーヴァは、主の人智を超えた活動を正しく判断しています。ですから結論として言えるのは、マハーラージャ・パリークシットに示された宗教の権化と地球の権化の苦しみは、マハーラージャ・パリークシットが理想的な指導者であることを証明するために用意されたということです。かれは、精神的発達の本の柱、すなわち雌牛（地球）とブラーフマナ（宗教原則）を守る方法を知っていたからです。だれもが、主に1から10

まで支配されています。主は、なにかがだれかによって為されることを望むとき、それがなんであろうと、主はすべてを完璧に準備します。マハーラージャ・パリークシットはこうして、みずからの偉大さを試されようとしたのです。それでは、かれが賢明な心でどう問題を解決するか、見てみようではありませんか。

第 2 1 節

सूत उवाच

एवं धर्मे प्रवदति स सम्राट् द्विजसत्तमाः ।
समाहितेन मनसा विखेदः पर्यचष्ट तम् ॥ २१ ॥

sūta uvāca
evam dharme pravadati
sa samrāṭ dvija-sattamāḥ
samāhitena manasā
vikheḍaḥ paryacṣṭa tam

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—そのように; *dharme*—宗教の権化; *pravadati*—そのように語って; *saḥ*—彼; *samrāṭ*—皇帝; *dvija-sattamāḥ*—ブラーフマナの第一人者よ; *samāhitena*—適切な注意力で; *manasā*—心によって; *vikheḍaḥ*—間違えることなく; *paryacṣṭa*—返答した; *tam*—彼に。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「ブラーフマナの第一人者よ。宗教の権化の話聞いたパリークシット皇帝は心から満足し、まちがうことも嘆くこともなく、答えた」

要旨解説

宗教の権化・雄牛の言葉は哲学と知識に完璧に支えられており、雄牛の苦しみがありきたりではないことを理解した王は、心から満足しました。至高主の法律に完璧に精通していなければ、哲学的真理を突いたこのような話はできません。皇帝は、同じレベルの賢明さをそなえていたからこそ、疑いもまちがいない要点を捉えました。

第 2 2 節

राजोवाच

धर्मं ब्रवीषि धर्मज्ञ धर्मोऽसि वृषरूपधृक् ।
यदधर्मकृतः स्थानं सूचकस्यापि तद्ववेत् ॥ २२ ॥

rājovāca

dharmam bravīṣi dharma-jña
dharmo 'si vṛṣa-rūpa-dhṛk
yad adharma-kṛtaḥ sthānam
sūcakasyāpi tad bhavet

rājā uvāca—王が言った; *dharmam*—宗教; *bravīṣi*—あなたが話したように; *dharma-jña*—宗教の原則を知る者よ; *dharmaj*—宗教の権化; *asi*—あなたは～である; *vṛṣa-rūpa-dhṛk*—雄牛の姿になって; *yat*—なんであつても; *adharma-kṛtaḥ*—無宗教的に行動する者; *sthānam*—場所; *sūcakasya*—同一視する者の; *api*—もまた; *tat*—それ; *bhavet*—～になる。

王が言った。「雄牛の姿をまとった方よ！ あなたは宗教の真理を知っている方であり、無宗教的な活動をする罪人が行くところに、その罪人を罪人とみなしている者も行くという原則にもとづいて話しています。あなたは宗教の権化その方です」

要旨解説

主の承認なくして、だれかが恩人であろうと極悪人であろうと、そのことに直接の責任はない、と献愛者は結論づけます。ですから、そのようなことをしても、直接その人に責任があるとは考えません。しかしどちらの場合でも、恩恵でも損失でも、神が与えたものだから、それは主の恩寵でなされたもの、と当然のように考えます。恩恵のときには、神が与えたもの、ということだれも否定しませんが、損失や不運の場合は、主が献愛者を大きな災難に落とし入れるほど薄情なのか、と疑いを持ちます。イエス・キリストは、そのような苦境に落とし入れられたように見えますが、極悪人たちに怒りを感じることはありませんでした。それが、有利なことでも不利なことでも、あるものごとを受けいれるときの方法です。こうして、献愛者にとっては、同一視する者は、極悪人のように、罪人と同じです。神の恩寵によって、献愛者はどのような逆境にも耐えます。マハーラージャ・パリークシットはそのことをまのあたりにし、

だからこそ、その雄牛がまさに宗教の権化その方であることを理解することができました。言いかえれば、献愛者に苦しみはまったくなく、ということです。いわゆる苦しみといっても、それは、すべてのなかに神を見ている献愛者にとっては神の恩寵にほかなりません。雌牛と雄牛は、カリの権化から拷問を受けても王に苦情を訴えることはしませんでした。ふつうの人間なら、国の権威者に苦情を訴えるところですが。雄牛のこのような並外れたふるまいを見た王は、この雄牛は宗教の権化に違いない、と結論をくだしました。宗教の原則にある優れた複雑さはほかのだれにも理解できなかつたからです。

第23節

अथवा देवमायाया नूनं गतिरगोचरा ।
चेतसो वचसश्चापि भूतानामिति निश्चयः ॥ २३ ॥

*athavā deva-māyāyā
nūnam gatiṛ agocarā
cetaso vacasaś cāpi
bhūtānām iti niścayaḥ*

athavā—代わりに; *deva*—主; *māyāyāḥ*—エネルギー; *nūnam*—非常に少ない; *gatiḥ*—動き; *agocarā*—想像を絶している; *cetasaḥ*—心によっても; *vacasaḥ*—言葉によって; *ca*—あるいは; *api*—もまた; *bhūtānām*—全生命体の; *iti*—こうして; *niścayaḥ*—結論されて。

ですから、主のエネルギーは想像を絶しているものと断言できます。頭脳や言葉を駆使しても、それらを把握することはできません。

要旨解説

「献愛者は主がすべての窮極の行為者であることを確かに知っているとしても、なぜ自分を活動者と見てはいけないのか」という質問があるかもしれません。窮極の行為者を知っているのであれば、ほんとうの実行者を知らないふりをすべきではないはず。この疑いの答として、「すべては主の代理者であるマーヤー・シャクティ、つまり物質エネルギーによってなされているから、主は直接責任を負っているわけではない」と言うことができます。物質エネルギーはいつでも、私たちの心のなかに主の至上の権威に対する疑いを起こさせようとしています。宗教原則の権化は、至高主の許しがなければなんにも起こらないことを完璧に知っていたの

ですが、幻惑のエネルギーによって疑惑に包まれ、至上の原因について言及することを避けています。この疑いは、カリと物質エネルギーの穢れから生じます。カリ時代の邪悪な環境は幻想エネルギーによって増大され、またそれがどれほど広がっているかは説明さえできません。

第 2 4 節

तपः शौचं दया सत्यमिति पादाः कृते कृताः ।
अधर्माशैस्त्रयो भग्नाः स्मयस्रामदैस्त्व ॥ २४ ॥

*tapaḥ śaucam dayā satyam
iti pādāḥ kṛte kṛtāḥ
adharmāśais trayo bhagnāḥ
smaya-sraṅga-madaiḥ tava*

tapaḥ—苦行; *śaucam*—清潔さ; *dayā*—慈悲; *satyam*—誠実さ; *iti*—そのように; *pādāḥ*—足; *kṛte*—サツテヤの時代に; *kṛtāḥ*—確立されて; *adharmā*—無宗教; *śaiḥ*—その部分によって; *trayaḥ*—3つが結合して; *bhagnāḥ*—折れて; *smaya*—奢り; *sraṅga*—女性との過度のつきあい; *madaiḥ*—陶酔; *tava*—あなたの。

サツテヤ（誠実さ）の時代で、あなたの4本の足は、苦行、清潔さ、慈悲心、誠実さという4つの原則にしっかりと築かれていました。ところがいまでは3本の足が、奢り、女性への欲情、陶酔という形となって現われている恐ろしい無宗教ゆえに折れてしまいました。

要旨解説

幻惑させるエネルギー・物質自然は、マーヤーの惑わせる力に生命体が影響される程度に応じてその力を発揮させます。蛾は光から出ているまばゆい明かりに惑わされ、その火の餌食になるのです。同じように、惑わせる力はいつも条件づけられた魂の心をつかまえ、幻惑の火の餌食にしようと待ちかまえています。ヴェーダ経典は、その力に惑わされずに反撃するようかれらに警告しています。ヴェーダは私たちに、無知の暗闇に入るのではなく、光の道を進むよう助言します。主もみずから私たちに警告しています、「物質エネルギーの惑わせる力はあまりにも強いために、独力で征服できるものではない、が、主にすっかり身をゆだねた者はかんたんに克服できる」と。しかし、主の蓮華の御足に身をゆだねることはかんたんなことではありません。服従できるのは、苦行、清潔さ、慈悲心、誠実さをそなえた人物にかぎられてい

ます。この4つの高尚な文化の原則は、サッチャ時代で顕著に現われていました。当時はだれもが十分な資質をそなえ、もっとも高い地位であるブラーフマナにふさわしく、だれもがパラマハンサ・放棄階級というもっとも高い境地にいました。文化的基盤からすれば、人間は幻惑エネルギーには決して影響されないはずです。そのような堅固な気質をそなえた人々は、マヤーの束縛から逃れられる力を十分にそなえていました。ところが徐々に、ブラーフマナ文化の基本的原則、すなわち苦行、清潔心、慈悲心、誠実さにとってかわって、奢り、女性への執着、陶酔の高まりが次第に高まることで失われていき、解放への道、あるいは超越的な喜びの道は人間社会からみるまに遠ざかってしまいました。カリ時代が進むにつれ、人々は奢り、女性と陶酔物に執着するようになっていきます。カリ時代の影響で、貧困者でさえわずかなお金を自慢し、女性は男性の心を惑わせるために情欲をかきたてる服を着て、男性は酒、たばこ、お茶などにうつつを抜かすようになりました。このような悪癖、あるいはいわゆる文化の発達、あらゆる無宗教の根源であるため、墮落や賄賂や縁者びいきを根絶することはできません。人間はこのようないまわしい流れを、法律の制定や警察力に頼るだけでは止められません。適切な薬であるブラーフマナ文化、すなわち苦行・清潔心・慈悲心・誠実さの原則を広めることで心の病を治すことができます。現代文化と経済発展は、消費者物価を脅かす貧困と欠乏という新しい状況を作りだしています。社会の指導者層と裕福階級者たちが蓄えた財産の半分を、まちがって導かれた人々のために使い、かれらを『シュリーマド・バーガヴァタム』の知識をとおして神の意識に導けば、まちがいなくカリ時代は、条件づけられた魂を墮落させる試みで失敗するはずです。偽りのプライド、自分の価値の過大評価、女性への過度の執着と交わり、陶酔物は、どれほど人々が世界の平和を強く求めても、人間文化を平和の道から逸らしてしまうことを、私たちはよく肝に銘じておかななくてはなりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』の原則を世に広めればおのずから、だれもが節度ある生活をし、内面も外面も清潔となり、苦しむ人々への慈悲心や日々の暮らしのなかで誠実さを高めていきます。それが、いま世界に顕著に現われている人間社会の欠陥を正す道なのです。

第25節

इदानीं धर्म पादस्ते सत्यं निर्वर्तयेद्यतः ।
तं जिघृक्षत्यधर्मोऽयमनृतेनैधितः कलिः ॥ २५ ॥

*idānīm dharmā pādas te
satyam nirvartayed yataḥ*

tam jighṛkṣaty adharmo 'yam

anṛtenaidhitah kaliḥ

idānim—今この時に; *dharma*—宗教の権化よ; *pādaḥ*—足; *te*—あなたの; *satyam*—誠実さ; *nirvartayet*—よろめいている; *yataḥ*—それによって; *tam*—それ; *jighṛkṣati*—破壊しようとしている; *adharmah*—宗教の権化; *ayam*—これ; *anṛtena*—詐欺によって; *edhitah*—繁栄している; *kaliḥ*—口論の権化。

あなたはいま、誠実さの印である1本の足だけで立ち、いまにも倒れそうな状態にあります。しかし口論の権化(カリ)は、欺瞞によって力を増し、その足でさえ破壊しようとしています。

要旨解説

宗教原則は、教義や人間が作った宗教形式ではなく、4つの主要な規定の遵守、すなわち苦行、清潔さ、慈悲心、誠実さで支えられています。一般大衆は、幼いころからこの原則を教わらなくてはなりません。苦行とは、体にはあまり快適ではないことでも自分から進んで受け入れ、そのことでほんとうに精神的悟りを助けてくれる行為を指し、たとえば絶食が挙げられます。1月に2回から4回の絶食は、精神的な悟りを得るためだけにする苦行であり、政治など、ほかの理由で行なうべきものではありません。自己を悟るのではなく、別の目的でなされる絶食は『バガヴァッド・ギーター』(第17章・第5-6節)で非難されています。同じように、清潔さは心と体にも必要なことです。体を清潔にすればそれなりに高められるのですが、なによりも心を清潔にすべきであり、それは至高主を讃えることで達成できます。至高主を讃えなければ、心のなかに積まれたよごれを洗い流すことはできません。無神論の文化は、神のことがおろそかにされていますから心を清潔にしてはくれませんし、この単純明快な理由から、その文化で育った人々は物質的には優れてはいても、真に優れた気質をそなえることはできません。行動の結果を見れば、その行動の善し悪しがわかります。カリ時代での人間文化の活動の結果は「不満」であり、だからこそだれもが心の平和を強く求めています。心の平和はサツチャ・ユガでは完璧に満たされていましたが、上記の優れた質をすべての人々が完璧にそなえていたからです。トゥレター・ユガになるとやがてその特質は4分の3に減り、ドゥヴァーパラ・ユガでは半分になり、カリ・ユガでは4分の1にまで減り、さらにそれさえも、世界に広がる不誠実のために次第に減少しています。奢りがあれば、それが表面的なにしろほんとうの奢りにしろ、苦行の結果は消えていってしまいます。女性とあまりにもかかわれば清潔さは失われ、陶酔物にのめりこめば慈悲の心がなくなり、欺瞞に満ちた政治宣伝のために人々は誠実さを失っていきます。人間文化は、バーガヴァタ・ダルマをよみがえらせることで、言葉では言いつ

くせないほどの邪悪な墮落から救われます。

第26節

इयं च भूमिर्भगवता न्यासितोरुभरा सती ।
श्रीमद्विस्तत्पदन्यासैः सर्वतः कृतकौतुका ॥ २६ ॥

*iyam ca bhūmir bhagavatā
nyāsitoru-bharā satī
śrīmadbhis tat-pada-nyāsaiḥ
sarvataḥ kṛta-kautukā*

iyam—これ; *ca*—そして; *bhūmiḥ*—地球の表面; *bhagavatā*—人格主神によって; *nyāsita*—個人的に、あるいは他の者達によって為されて; *uru*—巨大な; *bharā*—重荷; *satī*—そのように為されて; *śrīmadbhis*—あらゆる面で吉兆なことによって; *tat*—それ; *pada-nyāsaiḥ*—足跡 (あしあと); *sarvataḥ*—あらゆる場所に; *kṛta*—為された; *kautukā*—幸運。

地球の重荷は、人格主神によって、そして他の人々によって確実に和らげられました。主は化身としてこの世界にいたとき、その吉兆な足跡があったからこそ、あらゆるすばらしい出来事が実現されたのです。

第27節

शोचत्यश्रुकला साध्वी दुर्भगेवोज्झितासती ।
अब्रह्मण्या नृपव्याजाः शूद्रा भोक्ष्यन्ति मामिति ॥ २७ ॥

*śocaty aśru-kalā sādhvī
durbhagevojhitā satī
abrahmaṇyā nṛpa-vyājāḥ
śūdrā bhokṣyanti mām iti*

śocati—嘆いている; *aśru-kalā*—目に涙を浮かべて; *sādhvī*—貞節な者; *durbhagā*—もっとも不運な者のように; *iva*—〜のように; *ujjhitā*—孤独な; *satī*—そのようになされて; *abrahmaṇyāḥ*—ブラーフマナ文化がない; *nṛpa-vyājāḥ*—支配者のふりをしている; *śūdrāḥ*—下等階級;

bhokṣyanti—楽しむだろう; *mām*—私を; *iti*—そうして。

そしていま、人格主神に見捨てられた貞節なかのじよは、目に涙を浮かべて自分のゆくすえを嘆いています。指導者のふりをしている下等な男たちに支配され、もてあそばれているからです。

要旨解説

クシャトリア、あるいは苦しむ者を救うにふさわしい男性は、国を治めるためにいます。正しい訓練も受けていない下等な人間たち、あるいは苦しむ人々を守る気持ちもない者たちは、指導者の地位に就かせるべきではありません。嘆かわしいことにカリ時代では、下等な地位の人間たちが、なんの訓練も受けることなく国民の投票という力に頼って支配者の地位にいきなり、苦しむ人々を守るかわりに、だれも耐えられないような状況を作りだしています。そのような統治者は、市民の快適な生活を犠牲にしても自分の満足を優先させ、こうして、貞節な母なる地球は、人も動物も含む我が子たちの哀れな状況を見て泣いています。それが、無宗教がいちじるしく世を包みこむカリ時代の世界の未来です。そして無宗教的傾向を抑えることのできる王がいない状況では、『シュリーマド・バーガヴァタム』の教えで人々を系統的に教育することが、退廃、賄賂、恐喝などはびこる茫漠とした世界を清めることができるのです。

第28節

इति धर्मं महीं चैव सान्त्वयित्वा महारथः ।
निशातमाददे खड्गं कलयेऽधर्महेतवे ॥ २८ ॥

iti dharmam mahīm caiva
sāntvayitvā mahā-rathaḥ
niśātam ādade khaḍgam
kalaye 'dharma-hetave

iti—こうして; *dharmam*—宗教の権化; *mahīm*—地球; *ca*—もまた; *eva*—～として; *sāntvayitvā*—慰めたあと; *mahā-rathaḥ*—何千もの敵と一人で戦うことのできた将軍; *niśātam*—鋭い; *ādade*—抜いた; *khaḍgam*—刀; *kalaye*—カリの権化を殺すために; *adharmā*—無宗教; *hetave*—根本原因。

一千人の戦士と一人で戦えるマハーラージャ・パリークシットは、このように宗教と地球の

権化を慰めた。そして鋭い剣を抜き、あらゆる無宗教の根源となっているカリの権化を殺そうとした。

要旨解説

これまで述べられてきたように、カリの権化とは、啓示経典で禁じられている罪を意図的にすべて犯している人間を指します。カリ時代にはたしかにカリの活動が蔓延していますが、だからといって、社会の指導者、行政指導者、博識で知性ある人々、まして主の献愛者は、ただじっと座ってカリ時代の反動を黙って見てもいい、というわけではありません。雨期になれば確実に大量の雨が降ってきますが、だからといって、雨から身を守る方法を採らなくてもいいというわけではありません。国の筆頭者の義務は、カリの、あるいはカリ時代に影響された人々の活動に対抗する必要策をすべて採ることにあります。そしてマハーラージャ・パリークシットこそが、その国の理想的な筆頭者です。なぜなら、すぐさま鋭い剣を抜いてカリの権化を殺そうとしたからです。行政者たちは、いたずらに世の墮落を止める解決策を作るだけではなく、認められたシャーストラの視野と見解にもとづいて、墮落した状況を作りだしている人間たちを鋭い剣で殺そうとしなくてはなりません。行政者たちは、酒屋の営業を許すことで人々の墮落を止めることはできません。麻薬や酒を扱う場所をすぐに閉鎖し、たとえ死罪をもってしても、無差別に陶酔物にふけている者たちを処罰しなくてはなりません。それがカリの活動を止める方法であり、それはここでマハーラージャ・パリークシットというマハー・ラタ (*mahā-ratha*) によって立証されています。

第29節

तं जिघांसुमभिप्रेत्य विहाय नृपलाञ्छनम् ।
तत्पादमूलं शिरसा समगाद् भयविह्वलः ॥ २९ ॥

tam jighāmsuṃ abhipretya
vihāya nṛpa-lāñchanam
tat-pāda-mūlam śirasā
samagād bhaya-vihvalaḥ

tam—彼を; *jighāmsuṃ*—殺そうとしている; *abhipretya*—それがよくわかっている; *vihāya*—横に置いている; *nṛpa-lāñchanam*—王の衣服; *tat-pāda-mūlam*—彼の足もとに; *śirasā*—頭で;

samagāt—完全に服従して; bhaya-vihvalaḥ—恐怖心に圧倒されて。

王がほんとうに自分を殺そうとしていることがわかったカリの権化は、すぐに王の衣服を脱ぎ捨て、恐怖心に縮みあがり、平伏した。

要旨解説

カリの権化が身につけていた衣服はただの見せかけでした。王としての服装は王やクシャトリヤにふさわしいのですが、低俗な人間が王として見せかけで服を着ても、マハーラージャ・パリークシットのような本物のクシャトリヤから戦いを挑まれるとおのずと暴かれるものです。真のクシャトリヤはぜったいに降参しません。ライバルのクシャトリヤの挑戦を敢然と受けいれ、戦って死ぬか、勝利を手にするのです。降参するのは本物のクシャトリヤにはありえません。カリ時代では、自分を政治家や行政の筆頭者のかっこうをしたり見せかけたりする詐欺師が横行していますが、本物のクシャトリヤから挑戦されると、本性を表わすものです。ですから、かっこうだけのカリの時代は、マハーラージャ・パリークシットと戦ってもとうてい勝てるものではないことがわかると、家来のようにすぐに平伏し、着ていた王の衣服を脱ぎ捨てたのでした。

第30節

पतितं पादयोर्वीरः कृपया दीनवत्सलः ।
शरण्यो नावधीच्छ्लोक्य आह चेदं हसन्निव ॥ ३० ॥

patitam pādāyor vīraḥ
kṛpayā dīna-vatsalaḥ
śaraṇyo nāvadhīc chlokya
āha cedam hasann iva

patitam—墮落した; pādāyoḥ—足元に; vīraḥ—その英雄; kṛpayā—同情心から; dīna-vatsalaḥ—哀れな者に優しい; śaraṇyaḥ—服従した者を受けいれるにふさわしい者; na—～ではない; avadhīc—殺した; ślokyah—謳われるにふさわしい者; āha—言った; ca—もまた; idam—これ; hasan—微笑んでいる; iva—～のように。

服従した者を受けいれ、歴史を通じて謳われるにふさわしいマハーラージャ・パリークシット

トは、哀れで、また墮落したカリを殺さなかった。王は情けぶかく微笑んでいる。哀れな者に慈悲深い人物だったからである。

要旨解説

ふつうのクシャトリアでさえ、降参した敵は殺さないのですから、生まれつき心優しく、また哀れな者に優しいマハーラージャ・パリークシットが同じことをするのは当たりまえです。パリークシット王は微笑んでいました。それは、偽装していたカリが下等な人間であることを白状したからですが、また同時に、かつて自分が殺そうとした相手はその鋭い剣から逃れることができなかったのに、この哀れで下等なカリがじつにタイミングよく服従したことを皮肉なことと感じていました。だからマハーラージャ・パリークシットの栄光と優しさは謳われるにふさわしいのです。かれは心優しく、また哀れみ深い皇帝であり、敵であっても降参すれば受け入れる資質をそなえていました。こうして、カリの権化は天の摂理によって救われたのでした。

第31節

राजोवाच

न ते गुडाकेशयशोधराणां
बद्धाञ्जलेर्वै भयमस्ति किञ्चित् ।
न वर्तितव्यं भवता कथञ्चन
क्षेत्रे मदीये त्वमधर्मबन्धुः ॥ ३१ ॥

rājovāca

na te guḍākeśa-yaśo-dharāṇām
baddhāñjaler vai bhayam asti kiñcit
na vartitavyam bhavatā kathañcana
kṣetre madīye tvam adharmabandhuḥ

rājā uvāca—王が言った; na—～ではない; te—あなたの; guḍākeśa—アルジュナ;
yaśaḥ-dharāṇām—その名声を受け継いだ私達の; baddha-añjaleḥ—手を合わせている者; vai—
確かに; bhayam—恐れる; asti—～がある; kiñcit—わずかでも; na—どちらも～ない;
vartitavyam—生きることが許される; bhavatā—あなたによって; kathañcana—ぜひ; kṣetre—そ
の場所で; madīye—私の王国で; tvam—あなた; adharmabandhuḥ—無宗教の友。

そこで王は答えた。「私たちはアルジュナの名声を受け継いでいる。ゆえに、手を合わせて私に身をゆだねているおまえを殺すわけにはいかない。だが、私の王国に住むのは許さない。おまえは無宗教の友人だからである」

要旨解説

あらゆる無宗教の友であるカリの権化は降参して許されましたが、どのような状況であっても、福祉国家内ではどこであっても住むことは許されません。パーンダヴァ兄弟は、クルクシェートラの戦いを起こした方である人格主神・主クリシュナに選ばれた代表者ですが、それはかれら個人の興味のためだったわけではありません。主は、マハーラージャ・ユディシュティラのような理想的な国王に、そしてマハーラージャ・パリークシットのような子孫に世界を治めてほしいと思っていたのですから、マハーラージャ・パリークシットのような責任ある国王は、パーンダヴァ兄弟のすばらしい名声を犠牲にしてまで、自分の王国内に無宗教の友人を住まわせるわけにはいきませんでした。それが国内の墮落を一掃する方法であり、ほかに方法はありません。無宗教の友人は国内から抹殺しなくてはならず、そうすることで、国を墮落から救うことができるのです。

第32節

त्वां वर्तमानं नरदेवदेहे-
ष्वनुप्रवृत्तोऽयमधर्मपूगः ।
लोभोऽनृतं चौर्यमनार्यमंहो
ज्येष्ठा च माया कलहश्च दम्भः ॥ ३२ ॥

*tvām vartamānam nara-deva-deheṣu
anupravṛtto 'yam adharmā-pūgaḥ
lobho 'nṛtam cauryam anāryam aṁho
jyeṣṭhā ca māyā kalahaś ca dambhaḥ*

tvām—あなた; *vartamānam*—存在する間; *nara-deva*—人としての神、あるいは王; *deheṣu*—体内に; *anupravṛttaḥ*—どこにでも起こる; *ayam*—これらすべて; *adharmā*—無宗教の原則; *pūgaḥ*—大衆の中に; *lobhaḥ*—貪欲; *anṛtam*—虚偽; *cauryam*—強盗; *anāryam*—無礼な行為; *aṁhaḥ*—背信行為; *jyeṣṭhā*—不運; *ca*—そして; *māyā*—詐欺; *kalahaḥ*—口論; *ca*—そして;

dambhaḥ—虚栄心。

もしもカリの権化・無宗教が、人が作った神、つまり国の代表者としてふるまうことが許されでもしたら、貪欲、虚偽、強盗、無礼な行為、背信行為、不運、詐欺、口論、虚栄心など、無宗教の原則がまちがいなく世にはびこることだろう。

要旨解説

宗教原則、すなわち苦行・清潔さ・慈悲心・誠実さは、すでに話しあってきたように、ある信念の従者たちが従うものです。ヒンドゥ教からイスラム教やキリスト教、あるいは他の信念に改宗し、背教者呼ばわりされたあげく、宗教原則に従わなくなる必要はありません。バーガヴァタが説く宗教は、宗教原則に従うことを強く勧めています。宗教の原則とは、ある種の教義ではなく、特定の信念にもとづく決まり事でもありません。そのような決まりは時代や場所で違うことがあります。大切なのは、宗教の目的をまっとうできたかを見きわめることにあります。真の原則を得ることなくある教義や形式だけにしがみつくとのは良くありません。宗教と一線を画す国は特定の信念に偏ることはないかもしれませんが、国家とは、上記の宗教原則に無関心であってはならないのです。しかしカリ時代に入ると、国の筆頭者たちは宗教原則から離れるようになり、そのため、かれらに守られながら宗教原則に反する物事、たとえば貪欲、虚偽、詐欺、盗みなどが自然に起こるようになり、これでは国内の墮落を防ごうと躍起になってもなにも実りません。

第 3 3 節

न वर्तितव्यं तदधर्मबन्धो
धर्मेण सत्येन च वर्तितव्ये ।
ब्रह्मावर्ते यत्र यजन्ति यज्ञै-
र्यज्ञेश्वरं यज्ञवितानविज्ञाः ॥ ३३ ॥

na vartitavyam tad adharmabandho
dharmeṇa satyena ca vartitavye
brahmāvarte yatra yajanti yajñair
yajñeśvaraṁ yajña-vitāna-vijñāḥ

na—～ではない; vartitavyam—留まる資格がある; tat—ゆえに; adharmā—無宗教性;

bandho—友人; dharmeṇa—宗教と共に; satyena—真理と共に; ca—もまた; vartitavye—～に位置されて; brahma-āvarte—儀式が行なわれている場所; yatra—～の場所; yajanti—正しく行なう; yajñaiḥ—儀式、あるいは献愛奉仕によって; yajña-īśvaram—至高主、人格主神に; yajña—儀式; vitāna—広がっている; vijñāḥ—熟練者達。

ゆえに、無宗教の仲間よ。おまえは、熟達者たちが最高人格主神の満足のために真理と宗教原則にもとづいて儀式をする場所にいつづける資格はない。

要旨解説

ヤゲーシュヴァラ (Yajñeśvara) ・最高人格主神は、あらゆる種類の儀式の受益者です。その儀式は時代に応じてさまざまな形式が定められています。言いかえると、儀式とは主の至高性を受け入れ、そのことで主があらゆる面で満たされる活動をすること、と定義することができます。無神論者は神の存在を信じませんし、主を満足させる儀式などもしません。主の至高性が認められ、儀式が行なわれている場所や国はどこでも、ブラフマーヴァルタ (brahmāvarta) と呼ばれています。世界各地にさまざまな国があり、どの国にも至高主を喜ばせるための多種多様の儀式がありますが、主を喜ばせる核心は『シュリーマド・バーガヴァタム』で定められており、それが誠実さです。宗教の基本原則は誠実さであり、すべての宗教の最終ゴールは主を満足させることにあります。カリ時代では、どの儀式にも共通するすばらしい方法がサンキールタナ・ヤギヤです。それが、ヤギヤの方法をどう世に広めるかを知っている熟練者の意見です。主チャイタンニャはこのヤギヤの方法を説きましたが、この節からわかることは、サンキールタナ・ヤギヤの儀式はどのような場所でも行なうことができ、カリの権化を追いはらい、人間社会がこの時代の餌食にならないよう救うことができるという事実です。

第34節

यस्मिन् हरिर्भगवानिज्यमान
इज्यात्ममूर्तिर्यजतां शं तनोति ।
कामानमोघान् स्थिरज्रामाना-
मन्तर्बहिर्वायुरिवैष आत्मा ॥ ३४ ॥

yasmin harir bhagavān ijjamāna
ijyātma-mūrtir yajatām śaṁ tanoti

kāmān amoghān sthira-jaṅgamānām
antar bahir vāyur ivaiṣa ātmā

yasmin—そのような供儀祭において; *hariḥ*—至高主; *bhagavān*—人格主神; *ijyamānaḥ*—崇拜されて; *ijya-ātma*—崇拜される主宰神たちの中心的魂; *mūrtiḥ*—その姿で; *yajatām*—崇拜する者達; *śam*—繁栄; *tanoti*—広がる; *kāmān*—望み; *amoghān*—不可侵の; *sthira-jaṅgamānām*—動いているもの・動いていないものすべての; *antaḥ*—～の中に; *bahiḥ*—外側; *vāyuḥ*—空気; *iva*—～のように; *eṣaḥ*—それらすべての; *ātmā*—精神的魂。

どのような儀式であろうと、たとえ半神が崇拜されることがあっても、崇拜の対象は至高主・人格主神だけである。主こそがだれにとっても至高の魂で、空気の内にも外にも存在しているからである。ゆえに、崇拜する者に幸福をもたらしているのは主しかいない。

要旨解説

インドラやチャンドラのような半神が崇拜され、かれらに供物が捧げられることもあります。儀式的報酬そのものは至高主から崇拜者に授けられるのであり、崇拜者に幸福をもたらすことができるのは主以外にだれもいません。半神は、たとえ崇拜されようとも、主の許可がなければなにもできない存在です。主が、動くもの・動かないものすべての至高の魂だからです。

『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第23節）でも、次のシュローカがこのことを確認しています。

ye 'py anya-devatā-bhaktā
yajante śraddhayānvitāḥ
te 'pi mām eva kaunteya
yajanty avidhi-pūrvakam

「クンティの子よ。他の神々に儀式をすとしても、それはただわたしのためだけにあるのだが、正しく理解されないまま為されているのである」

至高主は絶対唯一——それが事実です。主以外に神はいません。ですから、至高主は未来永劫にわたって物質創造界を超越しています。それでも、太陽、月、インドラなど、至高主の物質的な代表者でしかない半神を崇拜する人たちがたくさんいます。半神は、至高主の間接的で、主の質を表わす代表者です。しかし博識な学者や献愛者は、だれがだれかをよく知っています。

ですから、至高主を直接崇拜し、物質的で質的代表者のほうにその思いを逸らすことはありません。賢くない人だけが質的・物質的な代表者を崇拜するのですが、正しい規則にのっとっていないため、非礼な崇拜と言えます。

第35節

सूत उवाच

परीक्षितैवमादिष्टः स कलिर्जातवेपथुः ।
तमुद्यतासिमाहेदं दण्डपाणिमिवोद्यतम् ॥ ३५ ॥

sūta uvāca
parikṣitaivam ādiṣṭaḥ
sa kalir jāta-vepathuḥ
tam udyatāsim āhedam
daṇḍa-pāṇim ivodyatam

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *parikṣitā*—マハーラージャ・パリークシットによって; *evam*—そのように; *ādiṣṭaḥ*—命じられて; *saḥ*—彼; *kalir*—カリの権化; *jāta*—～があった; *vepathuḥ*—震えている; *tam*—彼を; *udyata*—振り上げて; *asim*—剣; *āha*—言った; *idam*—そのように; *daṇḍa-pāṇim*—死の権化、ヤマラージャ; *iva*—～のように; *udyatam*—ほとんど準備ができている。

シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った。「このようにマハーラージャ・パリークシットに命じられたカリの権化は、恐怖におののきはじめた。すぐにでも殺そうとするように立ちだかる王は、カリの目にヤマラージャのように見える。やがてカリは次のように話した」

要旨解説

パリークシット王は、命令に従わなければすぐにカリの権化を殺すつもりでいました。言うことを聞きさえすれば、命を奪うことはなかったのです。カリの権化も、いろいろと処罰をまぬがれようとはしたのですが、王に服従するしかないと心に決め、震えながら命ごいをしています。王、すなわち国の筆頭者は、カリの権化のまえでは死の権化・ヤマラージャのほどに強く、毅然として向かわなくてはなりません。王の命令はどうあっても従わなくてなりませんし、従えない犯罪者は命を失うしかありません。それがカリの権化という、市民の正常な生活を混乱させるカリの権化を支配する方法です。

第36節

कलिरुवाच

यत्र क्ववाथ वत्स्यामि सार्वभौम तवाज्ञया ।
लक्षये तत्र तत्रापि त्वामात्तेषुशरासनम् ॥ ३६ ॥

kalir uvāca

yatra kva vātha vatsyāmi
sārva-bhauma tavājñayā
lakṣaye tatra tatrāpi
tvām ātteṣu-śarāsanam

kalir uvāca—カリの権化が言った; *yatra*—どこにでも; *kva*—そしてどこでも; *vā*—どちらも; *atha*—その; *vatsyāmi*—私は住むだろう; *sārva-bhauma*—地球の主人（皇帝）よ; *tava*—あなたの; *ājñayā*—その命令によって; *lakṣaye*—私は見る; *tatra tatra*—どこもかしこも; *api*—もまた; *tvām*—陛下よ; *ātta*—引き取られて; *iṣu*—矢; *śarāsanam*—弓。

おお、陛下よ。あなた様のご命令でどこにでも住めるとしても、私の目に映るのはその弓と矢しかありません。

要旨解説

カリの権化はマハーラージャ・パリークシットが、全世界の全土の皇帝であることを目の当たりにすることができ、そのため、自分がどこに住もうと、その威厳を漂わせる王に会わなくてはなりません。カリの権化は害だけをもたらし、またマハーラージャ・パリークシットはそのような極悪非道な者たち、とくにカリの権化を懲らしめる存在でした。ですから、カリの権化は、別の場所で殺されるよりは、そこで王の手にかかって殺されたほうがよかったです。しかし結局はこの男も王に服従した魂だったので、必要なことをする立場にあったのは王だったので。

第37節

तन्मे धर्मभृतां श्रेष्ठ स्थानं निर्देष्टुमर्हसि ।
यत्रैव नियतो वत्स्य आतिष्ठस्तेऽनुशासनम् ॥ ३७ ॥

*tan me dharma-bhṛtām śreṣṭha
sthānam nirdeṣṭum arhasi
yatraiva niyato vatsya
ātiṣṭhamś te 'nuśāsanam*

tat—ゆえに; *me*—私に; *dharma-bhṛtām*—宗教の全保護者の; *śreṣṭha*—おお、筆頭者よ; *sthānam*—場所; *nirdeṣṭum*—定める; *arhasi*—あなたがそうしてくださるよう; *yatra*—～の場所; *eva*—確かに; *niyataḥ*—いつも; *vatsye*—住むことができる; *ātiṣṭhan*—永遠に位置されて; *te*—あなたの; *anuśāsanam*—あなたの支配下で。

ですから、宗教の保護者のなかの第一人者よ。どうか私のためにどこか場所をお決めください。私があなた様の統治下で守られつついつまでも住むことができますように。

要旨解説

カリの権化はマハーラージャ・パリークシットを宗教の保護者の筆頭者として話しかけています。パリークシット王は、降参した者を殺さない人物だったからです。服従した魂はなにがあっても守られなくてはなりません。敵だとしても、です。それが宗教原則なのですから。ならば私たちはかんたんに想像できます、敵ではなく献身的な召使いとして主に服従した人が人格主神からどのような保護を授かるかを。主は身をゆだねた魂を、すべての罪から、罪の行ないからはねかえってくる反動すべてから守るのです（『バガヴァッド・ギーター』 第18章・第66節）。

第38節

सूत उवाच

अभ्यर्थितस्तदा तस्मै स्थानानि कलये ददौ ।

द्यूतं पानं स्त्रियः सूना यत्राधर्मश्चतुर्विधः ॥ ३८ ॥

sūta uvāca

abhyarthitas tadā tasmai

sthānāni kalaye dadau

dyūtaṁ pānaṁ striyaḥ sūnā

yatrādharmas̄ catur-vidhaḥ

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; abhyarthitaḥ—そのように嘆願されて; tadā—その時; tasmai—彼に; sthānāni—場所; kalaye—カリの権化に; dadau—彼に許可を与えた; dyūtam—賭博; pānam—飲酒; striyaḥ—女性との不義の交わり; sūnā—動物の屠殺; yatra—どこでも; adharmāḥ—罪な行ない; catuḥ-vidhaḥ—4種類の。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「そのように嘆願されたマハーラージャ・パリークシットは、カリの権化に賭博、飲酒、売春、動物の殺害が行なわれている場所に住む許可を与えた」

要旨解説

無宗教の基本原則である奢り、売春、陶酔、詐欺などは、宗教の4つの原則である苦行、清潔さ、慈悲心、誠実さの高まりを妨害します。カリの権化は、王が特に挙げた4つの場所、すなわち賭博の場所、売春の場所、飲酒の場所、動物屠殺の場所に住む許可を得ました。

シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、サウトウラーマニー・ヤギャ (sautrāmaṇī-yajña) のような経典の原則に反する飲酒、結婚していない女性とのつきあい、経典の教えに反する動物殺害はすべて無宗教である、と説いています。ヴェーダには2種類の教えが、プラヴリッタ (pravṛtta) ・物質的楽しみにふける者たち、ニヴリッタ (nivṛtta) ・物質的束縛から解放されている者たちのために用意されています。プラヴリッタに対するヴェーダの教えは、かれらを徐々に解放の道に導く活動を定めています。ですから、無知という最低の段階にいる人たち、そして酒、女性、肉食にふけている人々には、サウトウラーマニー・ヤギャを執行了うえて酒を飲み、結婚して女性と交わり、儀式をして肉を食べることが勧められることがあります。ヴェーダ経典のような推薦は特定の人だけにあり、だれにも共通しているわけではありません。しかしそれでも、特定の種類の人に向けられたヴェーダの教えですから、プラヴリッティの活動はアダルマ (adharmā) ではありません。ある人にとっては食糧ではあっても、別の人には毒であったりします。同じように、無知の様式の人への教えは、徳の様式にいる人たちには毒になったりします。ですからシュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミー・プラブは、特定の段階にいる人々に向けられる経典の推薦は、アダルマ・無宗教ではない、と断言しています。しかし、ほんとうのアダルマの活動は勧められるべきではありません。経典の推奨はアダルマを助長するのではなく、必要とされるアダルマを徐々にダルマの道に向ける制限なのです。

国の筆頭者全員がマハーラージャ・パリークシットの足跡に従い、宗教原則である苦行・清潔さ・慈悲心・誠実さが国内で確立されていること、無宗教の原則である奢り・女性との不義

の関係や売春・陶酔・欺瞞があらゆる手段で禁じられていることを見きわめなくてはなりません。そして、不利な状況にあっても最善を尽くすためにも、カリの権化は賭博・飲酒・売春・屠殺場、あるいはそのような場所に移さなくてはなりません。このような無宗教的な習慣にふけている人々は、経典の教えをとおして矯正されます。どのような国であっても、かれらの無宗教的慣習が助長されるべきではありません。言いかえれば、国はどのようなものでも賭博・飲酒・売春・欺瞞を徹底的にやめさせる、ということです。大衆が墮落するのは止めたい国は、以下のように宗教原則を紹介することができます。

1. 月に必ず2回の（時にはそれ以上の）絶食日に従う（苦行）。月に2回絶食することは経済的な面から見ても、膨大な量の食糧の節約につながりますし、市民の健康面でもたいへん都合のよいものです。

2. 24歳になった男性と16歳になった女性が伴侶となる場合、必ず結婚式をとおして結ばれなくてはなりません。学校や大学での男女共学に関しては、男女が正しく結婚するのであれば問題はありませんが、男性と女性の生徒が親密な関係になった場合、不義な関係を続けていくのではなく、適切に結婚しなくてはなりません。離婚は売春を助長するものですから、廃止すべきです。

3. 市民は収入の半分を、国内で、あるいは人間社会で個人的・全体的にも精神的環境を作り出す目的で慈善をすべきです。そして『バガヴァッド・ギーター』の原則を布教しなくてはなりません。その方法として、(a)カルマ・ヨーガ、すなわち主を満足させる活動、(b) 権威ある人物あるいは悟った魂から『シュリーマド・バーガヴァタム』を定期的に聞くこと、(c) 家庭で、あるいは崇拜の場所で集まって主の栄光を唱えること、(d) 『シュリーマド・バーガヴァタム』の布教に専心しているバーガヴァタにあらゆる奉仕をすること、そして(e) 神の意識に満たされている環境がみなぎる場所に住むこと、が挙げられます。国がこのような方法で治められれば、しぜんに、どの場所も神の意識で満たされるようになります。

賭博は、投機的ビジネス事業を含むどのような形であっても人を墮落させ、賭博が国内で助長されるのであれば、誠実さは完全に姿を消していきます。先に挙げた年齢に達している若い男女が未婚のまま生活すること、そしてどのような手段であっても動物の屠殺はすぐに禁止しなくてはなりません。肉を食べる人たちは、上記の経典が示す手段をとおして食べることはできますが、それ以外は許されません。また、喫煙や茶を飲むことをも含むあらゆる陶酔物も禁止されるべきです。

第39節

पुनश्च याचमानाय जातरूपमदात्प्रभुः ।
ततोऽनृतं मदं कामं रजो वैरं च पञ्चमम् ॥ ३९ ॥

*punaś ca yācamānāya
jāta-rūpam adāt prabhuḥ
tato 'nṛtam madam kāmam
rajo vairam ca pañcamam*

punaḥ—再び; *ca*—もまた; *yācamānāya*—その物乞いに; *jāta-rūpam*—金; *adāt*—与えた; *prabhuḥ*—王; *tataḥ*—それによって; *anṛtam*—欺瞞; *madam*—陶醉; *kāmam*—欲望; *rajaḥ*—激情的な気持ちのために; *vairam*—敵意; *ca*—もまた; *pañcamam*—5番目のもの。

カリ時代の権化はさらに別のなにかを要求していた。そこで王は、金があるところに住む許可を与えた。金があるところには欺瞞、陶醉、欲望、嫉妬、敵意も同時に存在しているからである。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは、住む場所としてカリに4箇所を許しましたが、それでもカリには厳しい条件だと言えます。マハーラージャ・パリークシットが統治しているかぎり、そういう場所はなかったのですから。そこでカリは、かれの非道な目的が叶えられるような、そしてまちがいなく自分が住めるところを頼んだのです。その願いに対してマハーラージャ・パリークシットは、金があるところ、と許可します。金があるところには、上記の4つの物事、さらに敵意も同時に存在するからです。こうしてカリの権化が金の基準になったのです。『シュリーマド・バーガヴァタム』によると、金は欺瞞、陶醉、売春、嫉妬、敵意を増大させます。金本位制、そして流通貨幣だとしても悪い制度と言わざるをえません。金本位貨幣制度は、額面どおりの価値がないため欺瞞に支えられています。現実の金の価値を超えた価格で発行されているのですから、土台になっているのは欺瞞です。国という権威に支えられたこの不自然な通過の膨張のために、経済はさらに悪用されます。商品価格は、ありもしない悪い金、すなわち不自然な紙きれの貨幣のために不自然に高騰します。悪質な金が良質の金を排除するのです。為替取引には紙幣ではなく、ほんとうの金貨が使われなくてはなりません、その結果、金の悪用を止めることができます。女性を飾る金は、金の質ではなく、量の制限によって許されるべ

きです。そうすれば、欲望、嫉妬、敵意を避けることができます。金貨という現実の金が流通すれば、欺瞞や売春を作りだす金の影響は、おのずとなくなっていくものです。売春や欺瞞を抑止しようとする省庁もいらなくなります。

第40節

अमूनि पञ्च स्थानानि ह्यधर्मप्रभवः कलिः ।
औत्तरेयेण दत्तानि न्यवसत् तन्निदेशकृत् ॥ ४० ॥

*amūni pañca sthānāni
hy adharma-prabhavaḥ kaliḥ
auttareyeṇa dattāni
nyavasat tan-nideśa-kṛt*

amūni—それらすべて; *pañca*—5つ; *sthānāni*—場所; *hi*—確かに; *adharma*—無宗教の原則; *prabhavaḥ*—助長している; *kaliḥ*—カリの時代; *auttareyeṇa*—ウッタラーの息子によって; *dattāni*—救われた; *nyavasat*—住んだdwelt; *tat*—彼によって; *nideśa-kṛt*—指示されて。

このようにしてカリの権化は、ウッタラーの子であるマハーラージャ・パリークシットに指示されて、これらの5箇所に住むことが許されたのである。

要旨解説

このようにしてカリ時代は金を基準として始まりました。そのために欺瞞、陶酔、動物殺害、売春が全世界にはびこり、思慮分別のある人々は世の墮落を食いとめようとしています。その対抗策がここに述べられており、だれでもその方法を実践できます。

第41節

अथैतानि न सेवेत बुभूषुः पुरुषः क्वचित् ।
विशेषतो धर्मशीलो राजा लोकपतिर्गुरुः ॥ ४१ ॥

*athaitāni na seveta
bubhūṣuḥ puruṣaḥ kvacit*

viśeṣato dharma-śīlo
rājā loka-patir guruḥ

atha—ゆえに; *etāni*—これらすべて; *na*—決して～ない; *seveta*—接触する; *bubhūsuḥ*—幸福を願っている者達; *puruṣaḥ*—人; *kvacit*—どのような状況でも; *viśeṣataḥ*—特に; *dharma-śīlaḥ*—解放の道を進んでいる者達; *rājā*—王; *loka-patiḥ*—公の指導者; *guruḥ*—ブラーフマナとサンニャーシー。

ゆえに、確かな幸福を願う者はだれであろうと、とりわけ国王、宗教家、一般的な指導者、ブラーフマナ、サンニャーシーは、このような無宗教の原則にかかわるべきではない。

要旨解説

ブラーフマナはほかの階級の人々には教師、サンニャーシーはすべての階級と社会の地位の精神指導者です。ですから、人々の物質的な幸せをまかせられた国王や市民の指導者も、やはり精神指導者と言えます。精力的な宗教家や責任ある立場にいる人、あるいは価値ある人間生活を無駄にしたくないと思う人々は、無宗教の原則、とくに女性との不義の関係を避けなくてはなりません。誠実ではないブラーフマナは、「我こそはブラーフマナである」と主張する意味も力もすぐに失います。サンニャーシーが女性と不義の関係を持てば、サンニャーシーであるとする主張もまやかしになります。同じように、国王や市民の指導者がおごり高ぶり、酒を飲んだりたばこを吸ったりしているのであれば、市民を幸せに導くのに必要な資格を失います。誠実さはすべての宗教の基本原則です。人間社会の4種類の指導者、すなわちサンニャーシー、ブラーフマナ、王、市民の指導者は、それぞれの性格や資格にもとづいてしっかりと判断されなくてはなりません。社会の精神指導者として、または物質指導者として受けいられる以前に、上記の性格の基準に照らして判断されなくてはなりません。そのような市民の指導者は学術的な資質面では劣ったりするかもしれませんが、資格を台無しにする賭博、飲酒、売春、動物殺害という穢れから離れていなくてはなりません。

第42節

वृषस्य नद्यांस्त्रीन् पादान् तपः शौचं दयामिति ।
प्रतिसन्दध आश्वस्य महीं च समवर्धयत् ॥ ४२ ॥

vṛṣasya naṣṭāms trīn pādān
tapaḥ śaucam dayām iti
pratisandadha āśvāsya
mahīm ca samavardhayat

vṛṣasya—雄牛（宗教の権化）の；*naṣṭān*—失われた；*trīn*—3；*pādān*—足；*tapaḥ*—苦行；*śaucam*—清潔さ；*dayām*—慈悲心；*iti*—このように；*pratisandadhe*—再確立される；*āśvāsya*—激励される活動によって；*mahīm*—地球；*ca*—そして；*samavardhayat*—完璧に改善されて。

王はそのあと宗教の権化(雄牛)の失われた足をよみがえらせ、さまざまな活動を促進させ、地球の環境を敢然に快復させた。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは、カリの権化に特定の場所を選びはしましたが、じつはカ리를騙しています。カリ、ダルマ（雄牛の姿）、地球（雌牛の姿）をまえにしてかれは自分の王国がどういう状態にあるのかを把握しており、そのためすぐに適切な処置をとり、雄牛の足、すなわち苦行・清潔さ・慈悲心を再生させました。そして世界中の人々が幸せになるよう、金の保有を経済安定のために使われるのではないかと考えました。金は確かに欺瞞・陶醉・売春・敵意・暴力の温床にはなりますが、正しい王や市民の指導者、またブラーフマナやサンニャーシーに管理されれば、同じ金を、失われた雄牛の足や宗教の権化をよみがえらせるために正しく使うことができます。

そのためマハーラージャ・パリークシットは、祖父のアルジュナのように、カリのために保管されていた不正な金を集め、『シュリーマド・バーガヴァタム』が教えているように、サンキールタナ・ヤギヤのために使いました。すでに提案されているように、蓄積した富は3つの部分、すなわち主への奉仕への50%、家族のための25%、自分個人の出費としての25%に分けられます。主への奉仕、あるいはサンキールタナ・ヤギヤをとおして社会に精神的知識を広めるために使うのは、人類の慈悲を最大限に発揮していることになります。世界の人々は、精神的知識について、とくに主への献愛奉仕についてはほとんどなにも知らないため、献愛奉仕に関する系統的かつ超越的知識を広めることは、この世界で示すことのできる最大の慈悲です。各自がこれまで蓄積した金の50%を犠牲にすることを教われれば、まちがいなく、苦行・清潔さ・慈悲心もおのずとよみがえり、こうして、宗教の権化が失った3本の足は自動的に再生されます。十分な苦行・清潔さ・慈悲心・誠実さがあれば、自然に、母なる地球は心から満足し、

カリが人間社会の機構に浸透する可能性はほとんどなくなります。

第 4 3 - 4 4 節

स एष एतर्ह्यध्यास्त आसनं पार्थिवोचितम् ।
पितामहेनोपन्यस्तं राजारण्यं विविक्षता ॥ ४३ ॥
आस्तेऽधुना स राजर्षिः कौरवेन्द्रश्रियोल्लसन् ।
गजाह्वये महाभागश्चक्रवर्ती बृहच्छक्रवाः ॥ ४४ ॥

*sa eṣa etarhy adhyāsta
āsanam pārvhivocitam
pitāmahenoṣanyastam
rājñāraṇyam vivikṣatā*

*āste 'dhunā sa rājarṣiḥ
kauravendra-śriyollasan
gajāhvaye mahā-bhāgaś
cakravartī bṛhac-chravāḥ*

saḥ—彼; *eṣaḥ*—これ; *etarhi*—現在; *adhyāste*—～を治めている; *āsanam*—王座; *pārvhiva-ucitam*—まさにふさわしい王; *pitāmahena*—祖父によって; *uṣanyastam*—渡されて; *rājñā*—王によって; *araṇyam*—森; *vivikṣatā*—望んでいる; *āste*—そこにある; *adhunā*—現在; *saḥ*—それ; *rāja-rṣiḥ*—王達のなかの聖者; *kaurava-indra*—クルの王達の筆頭者; *śriyā*—栄光; *ullasan*—広がっている; *gajāhvaye*—ハスティナープラで; *mahā-bhāgaḥ*—もっとも幸運な者; *cakravartī*—その皇帝; *bṛhat-śravāḥ*—非常に名高い。

森に引きこもる決意をしたマハーラージャ・ユディシュティラからハスティナープラ王を譲られたもっとも幸運なマハーラージャ・パリークシット皇帝は、クル王家の王たちの業績によって讃えられることで、いま世界を大成功のもとに治めている。

要旨解説

ナイミシャーラニヤの聖者たちの長期間にわたる供儀祭は、マハーラージャ・パリークシットが他界した直後に執行されています。この儀式は1,000年続けられることになっており、そ

の初期には、主クリシュナの兄であるバラデーヴァの仲間たちがその儀場を訪れたとされています。ある権威者は、過去からの最短の時間差を示すためにこの節では現在時制が使われていると、説明しています。その意味からすると、この現在時制はここではマハーラージャ・パリークシットの統治にあてはまります。じっさいに継続していたのですから、現在時制を使うことができます。マハーラージャ・パリークシットが定めた原則はいまでもあてはまるのであり、権威者たちがその選択を決定しさえすれば人間社会全体は改善されます。私たちがマハーラージャ・パリークシットがしたことをすれば、カリの権化によって導入された不道德な行ないを国から追いはらうことができます。パリークシット皇帝はカリの場所をいくつか用意しましたが、じっさいにはカリは世界のどこにもそのような場所を見つけることができませんでした。マハーラージャ・パリークシットが賭博・飲酒・売春・動物殺害の場所が作られないよう厳しく目を光らせていたからです。現代政治家は国を退廃させたくないと思っていますが、愚かなかれらは、それをどう実行したらいいのかわかりません。賭博場、酒をはじめとする陶酔物を出す店、売春宿、ホテルでの売春、映画館、自分を含むあらゆる取引の欺瞞を許可しているのに、同時に国から退廃的な物事を追放したいと考えている——神の意識のない神の王国を作りたいと思っているのです。この2つの矛盾を混在させられるというのでしょうか。国を退廃から守りたいのであれば、まず宗教原則、すなわち苦行・清潔さ・慈悲心・誠実さを受け入れる社会を組織するのが先決であり、その状況を正しく作りあげるには、まず賭博・飲酒・売春・欺瞞の場所を封鎖しなくてはなりません。これらが『シュリーマド・バーガヴァタム』の各ページから学ぶことのできる実践的な教えです。

第45節

इत्थम्भूतानुभावोऽयमभिमन्युसुतो नृपः ।
यस्य पालयतः क्षौर्णी यूयं सत्राय दीक्षिताः ॥ ४५ ॥

*ittham-bhūtānubhāvo 'yam
abhimanyu-suto nṛpaḥ
yasya pālayataḥ kṣauṇīm
yūyam satrāya dikṣitāḥ*

ittham-bhūta—このように～である; *anubhāvaḥ*—経験; *ayam*—これの; *abhimanyu-sutaḥ*—アビマンニユの子息; *nṛpaḥ*—王; *yasya*—～である者の; *pālayataḥ*—彼の支配のため; *kṣauṇīm*—地上で; *yūyam*—あなた達全員; *satrāya*—儀式を執行することで; *dikṣitāḥ*—始めた。

アビマンニューのご子息、マハーラージャ・パリークシットはひじょうに経験豊かで、その卓越した管理と保護の力があつたからこそ、みなさんはこのような供儀祭が執行できるのである。

要旨解説

ブラーフマナとサンニャシーは社会の精神的発達に貢献できますが、いっぽうクシャトリヤという管理者たちは人類社会の物質的な平和と繁栄に貢献します。どちらも、完全な平和になくなくてはならない柱であり、ゆえに、人類共通の幸福のためにも互いに完全に協力しあわなくてはなりません。マハーラージャ・パリークシットはカリを自分の活動の場から追放できる経験豊かな人物であり、その経験にもとづき、国が精神的啓発を受けいられるよう築きました。一般大衆を受けいれる気持ちがなければ、精神的啓発の必要性をかれらの心に植えつけることは困難です。苦行・清潔さ・慈悲心・誠実さという宗教の基本原則は、精神的知識の発達を受けいれる礎を築いてくれるものであり、マハーラージャ・パリークシットはそのための有利な環境を用意しました。だからこそ、ナイミシヤラニャのリシたちは1,000年にわたる供儀祭を執行することができたのです。言いかえれば、国が支えてくれなければ哲学教義や宗教原則は正しく高められないということです。この共通の善のためにブラーフマナとクシャトリヤは完全に協力しあうべきです。マハーラージャ・アショカの時代にまでさえ、同じ精神は世に浸透していました。主仏陀はアショカ王に十分に守られていましたし、だからこそ主が説いた特定の教えが全世界に広がっていったのです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第17章、「カリに対する処罰と報い」の要旨解説を終了します。